

火野映司／オーズが幻
想入り

真奪還

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

戦いを終え、伸ばした手を紡ぐために旅を続けるオーズ／火野映司。彼はある日、忘れ去られたモノが集う地——幻想郷に来てしまった！

映司の来訪に呼応するが如く現れた忘れ去られたグリッド！ 映司の幻想の郷での戦いが始まる！

「――変身!!」

――タカ!

――トラ!

——バツタ!

——タ・ト・バ! タトバ、タットバ!!

*この作品はピックアップにも投稿しています

*なおこの作品は000本編の盛大なネタバレや独自解釈、独自設定などが多分に含まれております

目次

第001話 忘れられたグリードと幻想

入りと違和感 1

第002話 事情説明と心配とヤミー誕

生 6

第003話 人里とヤミー襲来とオーズ

再誕 16

第004話 気絶と誤解と謝罪 1

第005話 解説とプロトタイプと興味

第006話 戦う欲とブーメランと寢床 44

提供 53

第007話 黄色のメダルと怒号と奪取

命令 75

第008話 潜む脅威とグリード邂逅と

苦戦 89

第009話 加勢とザリガニとラトラ

ターの力 104

第010話 謝罪と危険と黒色 1

第011話 慰めと自分に出来ることと

誘拐 135

第012話 怒りと守ると灼熱コンボ

前編 145

第013話 怒りと守ると灼熱コンボ

後編 163

第001話 忘れられたグリードと幻想入りと違和感

闇、果てしない闇が広がる洞窟。そこに男が歩いている、壮年の目付きが鋭い男だ。

「——まさか、私のように幻想の郷に流れついていたとは思わなかったよ」

年相応の落ち着いた——だがどことなく浮かれている——声で喋る男。

男の眼前には円盤状の石盤が二つ、石台に鎮座していた。男は石盤の蓋(ふた)をゆっくり開ける。そこには橙色のメダルと黒色のメダルがそれぞれ十枚ずつあった。

男は中央に存在するメダルに手をかける。

「この一枚を抜くことによつて10と言う完全な数から9と言う欠けた数になる——」

男は詠うように言葉を紡ぎ、メダルを一枚ずつ抜いた。するとメダルが妖しく輝きだす。その様子を見た男は気持ちが高揚し、声も大きくなる。

「そして『欠けた数を埋めたい』という欲望が産まれ!! その欲望から——」

輝きがさらに勢いをまし、宙に浮かび上がるメダル。すると石台の隙間から銀色のメダルが大量に溢れだし、橙と黒のメダルを取り囲む。

「——『グリード』が誕生するツツツ!!!」

メダルの河は人の形を取り、やがて二つの異形が産まれ落ちた。

一つは蛇のような毒牙を持ち、亀の如き頑強な鎧。鰐（わに）の強靱な身体を持つ橙色の異形。

もう一つは蠍を思わず猛毒の針、あらゆるモノを切り裂く蟹のハサミ。海老の頑丈な甲殻を持つ黒色の異形。

「ハッピーバースデー……！　忘れ去られたグリードッツ!!」

男の高笑いが闇に包まれた洞窟にどこまでも響いた——



夜の闇が白み始め、あと二時間くらいもあれば朝がくるであろう時間帯。

聖徳道士——豊聡耳神子（とよさとみのみこ）はそんな微妙な時間に目が覚めた。無論、好きで目覚めたわけではない。みよんな夢を見たせいだ。

夢の内容は右腕の妖怪と一人の男の物語……だった気がする。殆ど忘れてしまった。——夢のことはどうでもいい夢のせいに変に目が冴えてしまい、二度寝をしようとしても寝付けない。

この時間帯だ。他の者はまだ寝てるだろう。

——皆（みな）が起きるまでの間、どうしようか……。

「…………散歩でもするか」

そう考え、寝間着から着替え愛用の耳当てを付け神子は外に出向いた。



神子らが住む道場は仙術によって作り出した異空間——仙界に存在する。

異空間と言っても普通の空間とさほど変わりはなく、動物がいないのが普通の空間と違うところだろうか。

神子はある程度舗装された道を歩いていた。散歩なので目的地はない。時間がたつたら戻ろう……と考えていた時——

——前方になにかの気配を感じた。

この仙界には動物は存在しない。皆もまだ寝静まっている。

つまり誰かがここに侵入して来たのだ。考えられる侵入者は妖怪の賢者だが、それにしては妖気が感じられない。

気配がどんどん近づいてくる、神子は念のためにスペルカードを構える。そして遂に仙界に侵入してきた不届き者の姿が見えた——

「あー、すいませーん!!」

なんとも気の抜ける人の好きそうな声と共に人間の青年が駆け寄ってくる。

異国風の服を纏い、下着がぶら下がっている木の枝を持つ人が好きそうな青年。だが、彼は簡単に入り込めない仙界に入ってきたのだ。神子は警戒を解かず青年に話し掛ける。

「君は……?」

「あ、俺は火野映司です。貴方は?」

「私は豊聡耳神子。——君はどこから来たのですか?　ここは簡単には来られはずなのですが……?」

神子の問いに青年——火野（ひの）映司（えいじ）はウーンと考え込む仕草を取りながらゆっくり喋り出す。

「俺も未だによく分からないんですけどエジプトの砂漠を歩いていたら、急に景色が歪みだして気づいたらここに居たんですよ。それで歩いていたら神子さんにあつたんです」

「……目玉が沢山ある空間の裂け目は見ましたか?」

「うーん………あ!　一瞬だけですけど見ました!」

——やはりアイツか……。

妖怪の賢者の持つ力、それで映司はここに連れてこられるのだ。

「それで、神子さん。ここはどこなんですか？」

「……………ここは幻想郷。——分かりやすく言うとは異世界です」

「えええええ!? 本当ですか!?!」「嘘をついてどうなるんですか……。それにしてもあまり驚かないのですかね?」

いきなり異世界に來たのなら普通はもつと驚き、戸惑う。だが、目の前の青年は驚きはしたが戸惑つてはいないむしろ落ち着いている。

「いや、こういう非現実的なことには慣れてるんで」

「……………どう言う暮らしをしてたんですか君……」

やや能天気な映司に思わず苦笑してしまう神子。

「さて、詳しい話は私の道場でしましょう。付いて来てください」

「はい、分かりました」

映司を自分の道場に案内する神子。

だが、神子は映司に違和感を感じていた。——欲が聴こえないのだ。

欲は万物に宿るモノ。しかし、映司にはその欲が聴こえない——いや、聴こえるには聴こえるのだが極端に薄いのだ人間とは思えない程に。そんな違和感を抱える映司、しかし外来人である以上放っておくわけにもいかない。

映司にたいして警戒を緩めず、神子は歩き出した——

第002話 事情説明と心配とヤミー誕生

「——忘れ去られたモノが集う地、幻想郷……ですか」

あれから道場兼住まいに案内された映司は神子と起床した蘇我屠自古（そがのとじこ）——映司は彼女の足を見た時、少し驚いたがすぐに慣れた——、物部布都（もののべのふと）と共に朝食を摂っていた。

彼女らの話によると幻想郷とは日本のある山奥に存在する外とは結界によって隔離された世界であり、外の世界では空想の存在とされてる妖怪、妖精、神などが住んでいるらしい。そして神子らは尸解仙（しかいせん）の術をつかい千四百年もの時から復活した人間らしい。

そして神子は聖人であり仙人でもあり神霊であるスーパーハイブリッドな人物なのだ。

「それにしても驚きました。神子さんがそんなに凄い人だったなんて」

「ふふーん、そうじゃろそうじゃろー」

幻想郷の説明と共に布都から神子の武勇伝——かなり語り手の主観が入ってるが——を聞き、映司はそう言いその言葉を聞いた、布都は自慢気だ。

「ふふつ、それほどでもありませんよ」

その様子を見た神子は笑みを零（こぼ）す。

しかし、未だに映司への警戒を解いてない。出会って数時間くらいしか経ってないが映司は好青年とも言うべき人柄だ。しかし、欲が一切聴こえないと言う異常が否応もなしに警戒してしまう。あの半人半霊の庭師でさえ欲は聴こえたと言うのに。

そんな神子の異変に気づいた屠自古は映司にバレないよう神子にヒツソリと話し掛ける。

「どうしたのですか太子様？ 少し変ですよ」

「……気づいてたのですね」

「当たり前です。何年、貴女の元に仕えてると思ってるんですか」

それを聞いた神子は、屠自古に映司の抱える違和感について話し始めた。ちなみに当の映司は布都と一緒に遊んでいる。

「実はあの者——映司から欲が聴こえませんでした」

「ええええ!!」

『欲が聴こえない』と言う言葉に驚愕する屠自古。だが、すぐに落ち着きを取り戻し、話を続ける。

「でもそれっておかしいですよ。まえ見かけた半人半霊のヤツならともかく、あの人は

どうみたって人間ですよ」

「だから分らないのですよ。人間である以上、欲は持っているはずなのに彼からは全く聴こえない……」

「……それで彼はどうするつもりなのですか？」

「博麗神社に送るつもりですが……まずは本人に聞いてからね」

神子は映司の方を見やる。そこには、

「あー、太子様！ どうですか似合いますか！ この帽子！」

「布都ちゃん！ ソレは被る物じゃなくて履く物ー！ てか俺の明日ーっ!!」

映司のパンツを帽子か何かと勘違いし、頭に被ってる布都とそれをどうにかしようとする映司の姿があった。その光景に屠自古は思いっきり吹き出し、神子も笑ってしまった。シリアスの台無しである。



「さて、映司。君はこれからどうしますか？」

朝食を済ました映司はこれからの予定を話し合っている最中だった。

ちなみに布都は映司からパンツを一枚貰った。気に入ったらしい。

「俺としては幻想郷を旅してみたいところですが……」

「結構危ない所ですよ？　（こゝろ）」

「ですよねえ……俺だつて食べられるのは嫌ですし……やつぱり帰ることにします。あ

！　でも人里は寄つてみたいかも！」

相変わらずやややノーテンキな映司。神子のため息を付きながらもそれを了承する。

「……分かりました。では、案内は私がしましょう」

「（ええっ!?!）」

「わー！　ありがとうございます！」

神子の発言に内心驚く屠自古と対照的に喜ぶ映司。

「では私は準備がありますので君は先に外に出てください」

「はい」

映司は外に出、神子と屠自古、布都の三人が残った。

そして屠自古は心配そうな顔で神子に聞く。

「大丈夫なのですか太子様……?」

「?」

事情が分かってない布都はきよんとんとしているが、事情を知る屠自古は心配している。

ただの人間なのに欲が欠落しているある意味イレギュラーな存在である映司、そんな彼が神子に害を為さないか不安なのだ。

「心配症ですね屠自古。でも大丈夫ですよ。もし仮にあの者が私に仇なす者なら相應の対処をするだけですよ」

「ですが……」

神子に宥められるも、まだ何か言いたげな屠自古。そんな彼女に神子は優しい口調で話す。

「だから大丈夫ですよ、私を信用してください」

「はい……」

「さて、映司を待たせてるので。布都、屠自古、留守番を頼みましたよ」

「おー！ 任せてくださいれ！」

なんとか納得した屠自古を見ると、二人に留守を任せ外へと出た。



映司と神子が出会う少し前、幻想郷のとある森。

そこに一匹の妖怪が歩いていった。

「あー……腹が減った……」

彼は人喰い妖怪であり割と凶暴な部類の妖怪なのだが……今の彼は空腹に悩まされている。その理由は外来人がてんで喰えないのである。本来なら最低でも二ヶ月に一人くらいは喰えてたのだが、ここ最近は他の妖怪に取られたりして食事にありつけない。

だから今日も空きっ腹を擦りながら、外来人を捜しているのだ。

「碌（ろく）にいやしねえ……もうオレは餓死でもすんのかあ？」
などと言っていた時である。

——目の前に橙色の異形が唐突に現われた——

異形の姿はまるで、

亀のようでもあり、

蛇のようでもあり、

鰐（わに）のようでもあり、

蜥蜴（とかげ）のようでもあり、

ヤモリのようでもあるその異形。

それは足音もなにも無く、まるで始めからそこにいたかのように現れた。異形は妖怪にこれまた唐突に語りかける。

「——貴様は腹が減っているのか？」

意図不明なその質問に妖怪は訝（いぶか）しげながらも、答える。

「あ、ああ、最近は人間を全然喰えなくてよお……」

「そうか……」

その回答に異形はニヤリと笑い、懐から見たこともない銀貨を取り出しこう言った。

「ならその欲望。——解放しろ」

異形が投げ出した銀貨はチャリンと言う音と共に、妖怪の中に入り込んだ。

するとどう言うことか妖怪の中から、包帯に包まれたような人型の異形が這い出てきた。包帯の異形は呻き声を上げながらフラフラと歩いている。

「ななななんだ！ コイツぁ!？」

「貴様が知る必要はない」

驚愕する妖怪の質問に橙色の異形は答えずに殴り飛ばす。妖怪は木に激突しそのまま気絶してしまった。

そして包帯の異形は相変わらず呻き声を上げながら辺りのモノを喰い始めた。木の実などは勿論、木や草、石に毒キノコ。果ては不運にも通りがかった妖精すらも無差別に食べる包帯の異形。すると包帯の異形は脱皮するかのように変化し、人型の蜥蜴に人間の顔が付いたような姿になった。

蜥蜴の異形は辺りにめぼしい物が無いと確認するやいなや、自らの欲望のままに『人里』へと向かった。

「この調子だとセルメダルはそれなりに期待できるな……」

橙色の異形は満足気に笑うとゆっくりとこの場から去った……。



そして時間は戻り。

「ふふふ……」

今日の藤原妹紅（ふじわらのもこう）はご機嫌だった。なぜなら今日は妹紅の好きなアイスキャンデーの特売日だからである。この日の為にお金を貯めてきたのだ。

親友である上白沢（かみしらさわ）慧音（けいね）からは「冷たい物ばかり食べると体を壊すぞ」と言われているが今回ばかりはいくら親友の頼みとは言え聞けない。

「今回は二十本くらい買おうか……」

自然と足並みは軽くなる。あと数分もすれば人里に着く、妹紅は前回食べたアイスキャンデーの味を思い出しながら歩いていった。

——しかしアイスキャンデーのことで浮かれていたのか、妹紅は突然の襲撃に対応

「ツクソ……い！ あっちには人里が……い！」

あんな危険な者を人里に入れるわけには行かない。妹紅は激痛を堪（こら）えながら人里へと飛んでいった。

第003話 人里とヤミー襲来とオーズ再誕

「うわー！ 凄い活気だなあ！」

人里へと着いた映司と神子。映司は人里の活気を見、感動している。

「いやー、俺も色んな所を旅をしてるけど、こう言うのは何時見ても良いモノですね」

「そういうものなのですか？」

「はいっ」

映司はこういった街の通りが好きだ。ここに住んでいる人の顔や情景、そういったものが凝縮されているのだ。

神子は先程から映司を見ているが、やっぱりちよつと変わっただけの普通の青年だ。やはりこの警戒も自分の思い込み過ぎではないのだろうか。神子はそう思い始めてきた。

「揚げ饅頭とかないかなあ、久しぶりに食べたいなあ」

「好物なんですネ」

「はい、まあ昔、何十個も食べた時は流石に飽きちゃいましたけどね」

「当たり前ですよ」

「ははは、ですよねー」

などたわいもない話をする二人。すると、神子が会話を切り出してきた。

「……映司。先程、話した幻想郷の住人が持つ能力の説明は覚えてますね？」

「はい。それがどうかしたんですか？」

幻想郷の住人にはそれぞれ能力を持っている。

冷気を操ったり、雷を操ったり、時間を操ったりと様々だ。そして神子の能力は——
「私の能力は『十人の話を同時に聞く事が出来る程度の能力』。言葉通り十人の話を聞き、理解することが出来ます。」

そして今は相手の欲も聞こえるようになりました。しかし——」

「しかし?」

「映司。君はただの人間のはずなのに欲が全く聞こえませんでした。それにいきなり幻想郷に来て大して慌てもしなく、幻想郷の話もすぐに信じた……。」

君は『不思議なことには慣れてる』と言っていました……、一体どんな不思議なことがあったのですか？」

神子がこう言ったのは単純に『興味を湧いた』のだ。

なぜ普通の人間である映司が欲が聞こえないのか、そんな興味が湧いてきたのだ。それに理由を知るためには本人に直接聞いた方が早いと判断したからというのもある。

「えつと……」

聞かれた映司は口を濁し、考え込む。しかしそれもすぐに終わり、意を決したかのようには話し出そうとした。

その時——

「実は——」

そう遠くない距離から悲鳴が響き渡った。

その悲鳴に呼応したかの如く、あれだけ活気に満ち溢れた人里が一瞬で静かになる。それも、嵐の前の静けさでありすぐにざわざわと嫌な意味で騒がしくなった。

「一体なにが……!?!」

いままでの優しげな顔から一転、緊張と警戒に満ちた顔になる映司。

「分かりませんが……不穏なことであることは間違いないようです——ぐう……!?!」
「神子さんッ!?!」

急に神子はその場で蹲（うづくま）ってしまった。なぜなら聞いてしまった、ここにいる大勢の人々の欲さえ掻き消してしまうほどのどこまでも純粹でどこまでも強壮たる欲を。彼女でさえ今まで聞いたことのない禍々しい欲望の奔流を。だから怯んでしまったのだ。

「（これは欲……!!? だけどこんなに巨大で禍々しい欲は……!!?）」

「神子さんッ! 大丈夫ですか!?!」

蹲っている神子に映司は駆け寄り、容態を確認する。

神子は先程聞いた欲の大きさに頭痛を感じながらもなんとか返事をした。

「大、丈夫です……。それより気をつけてください……!」

「気をつけるってなにを……!?!」

「禍々しい欲が聞こえ、ました……。もうすぐこちらに来ます……!」

——その瞬間。

「——ぎゃああああああ!!」

「ひひひひひひひひ!!」

ざわめきは悲鳴の合唱に変わる。

人々は我先にと「驚異」から逃げ出す。刹那にして人里は地獄絵図へと変貌した。

映司は逃げ出す人達の最後尾に見た。

里の守護者である上白沢慧音とその親友である藤原妹紅が人形の動物に人間の顔が付いたような異形、映司にとって決して忘れられないその「驚異」——ヤミーと戦っているところを。

◆

ヤミーの襲来はあまりにも唐突だった。人形の蜥蜴に人間の顔が付いた異形——トカゲヤミーが襲い掛かり人間達を喰い始めたと思ったら、すぐに血塗れの状態の妹紅がやってきてトカゲヤミーに炎を放った。それも弾幕ごっこでのあくまで『遊び』の炎ではなく、殺意を籠めた『殺す為』の炎を。

慧音は呆気にと取られていたが白沢（ハクタク）としての本能が目の前の異形を『退治』するものではなく『倒す』ものと判断し、妹紅の加勢へと向かった。

「ぐああああああ!!?」

トカゲヤミーが自警団の男の肘から先までの腕を喰った。喰われた男は壮絶な痛みを悶え苦しむ。

『モット………! モットタバタイイイイイイイツ!!』

「下がれ! コイツとは私達が戦う! お前達は逃げた人達を頼む!」

慧音の指示に従い、自警団は逃げ出した住民たちの誘導に向かった。状況は慧音たちの不利だ。頑強な鱗に覆われたトカゲヤミーには十分な殺傷力が籠った弾幕も軽い傷をつけたり怯んだりするだけ、致命傷を与えるには程遠い。

「ツクソ。ウザい位に硬い体だ」

「だが、私たちが頑張らなければ……!」

「ああ、分かっているよ」

そうは言うがこのままではジリ貧である。その時、トカゲヤミーに向かって地上と空中から二つの弾幕が放たれた。援軍が来たのだ。

「助太刀いたします!」

「やっぱりヤミーだ! でもなんで……!?!」

援軍の正体は最近、幻想郷にやってきた聖人。豊聡耳神子と恐らく外来人であろう青年だった。



「ヤミー……映司。あれを知ってるのですか?」

「はい。あれはヤミー、人の欲望が具現化した怪物で俺が体験した不思議な事の一つです。だけど、」

「だけど?」

「アイツらもう生まれないはずなんです。だから変なんですよ」

そうヤミーを造り出す者たちはもういない、神子には話してないがその者たちは全

員、映司と仲間達が倒したのだから。

だからなぜヤミーがそれも、幻想郷に――

「――詳しい話はあとで聞きます。映司、君はどこかに隠れていてください」

「ですけど……」

そんな映司に神子は語気を強めながらこう言った。

「映司。君はただの人間だ、だからはつきり言つて足手まといなんです」

「確かに神子の言うとおりで。今の自分はただの人間。かつてあつた戦う力もいまはもう、ない。

「はい……」

もちろん納得はしていない。だけどこれが一番正しい判断なのも分かつて、映司はどうしようもなく悔しかった。

力を求めなくとも伸ばした手を紡げば、絆があればどこまでも届くのは先の戦いで分かった。分かったのだが、だけど今は――

そうこう考えてる内に神子を交え、トカゲヤミーとの戦いが始まった。



——仙符「日出ずる処の道士」

——滅罪「正直者の死」

——始符「エフエメリテイ137」

蜥蜴の異形に向かって様々な彩りの弾幕が放たれる。人が見れば美しいと言うだろう、しかし今のは一つ一つが殺す為の力を秘めたものになっている。

『グオオオオオオオ!!』

弾幕のラツシユにさすがに頑丈なトカゲヤミーも効いたのか吹っ飛び、ゴロゴロと転がって。

しかし、

『モット！ モットタバタイイイイイイ!!』

すぐに起き上がり、三人に襲いかかる。

「硬いだけではなくタフと来た。厄介な相手だよ、まったく」

妹紅がそう悪態を吐く、トカゲヤミーは硬い鱗に包まれ防御力はかなり高く体力も凄まじい、オマケに走る速さはかなり物だ。

しかし妹紅らはトカゲヤミーに持ってない物を持っている。それは空を飛べることだ。空を飛べると言うことは戦闘に置いては、それは大きなアドバンテージになる。しかし、トカゲヤミーに対して決定打を持たないのも事実である。

『モツトオオオオ………!!』

手に届かない獲物を見、足掻くトカゲヤミー。確かに決定力はないが、このまま空から遠距離戦で攻めれば勝てるかもしれない。

「よし……このまま——」

慧音がそう言った。その瞬間——

『グオアアアアアアアアアアアッ!!』

痺れを切らしたのか、トカゲヤミーが大きく咆哮し、その表皮がボロボロと剥がれ落ちていく。まるで脱皮をするがごとく、全て剥がれ落ちた時にはトカゲヤミーは体格が一回りも大きくなり筋骨隆々の体つきとなった。

そして、変化はそれだけではない。

「ぐうううう………!!」

ヤミーが発する欲が更に大きくなったのだ。元々、不調を隠して戦いに挑んだ神子。

巨大になった欲に耐えきれなくなった。頭が割れそうになるくらいに痛みは激しさを増し、遂に地上にフラフラと堕ちていつてしまった。もちろんそれを逃すトカゲヤミーではない、勢いよく——筋肉のせいで速さは落ちたらしいがそれでもかなりの速さ——神子に突進してくる。妹紅や慧音も間に合いそうにない。

「(ここまでですか………すいません屠自古、布都………)」

——大丈夫だと言ったのに、約束を破ってしまいましたね……。そんなことを思いながら、来る衝撃に備え目を瞑った。



慧音も妹紅も神子のことを諦めていた。

その時、

「うおおおおおおおっ!!」

青年の叫び声が響きいた。

家屋がトカゲヤミーの突進で盛大な音ともに、壊れた。もうもうと砂煙が立ち込める。神子はゆっくりりと目を開ける、どうやら自分は無事らしい。

——でも何故？

その疑問はすぐに解決した。自分は抱き抱えられていた、青年——火野映司に。恐らく彼は自らの身を挺し、自分を守ったのだらう。

「大丈夫ですか？ 神子さん」

「——なぜ、ですか……？」

「？」

「なぜ、会って数刻しか経ってない私を、自らの命を危険に晒してまで助けたのですか……?」

神子は新しい疑問が生まれた。映司と神子は会って数時間くらいしか経っていない、しかし映司は命を賭して神子を助けた。それが不思議でならない。

「だって当たり前ですよ」

映司はさも当然のようにその疑問に答えた。

「神子さんとは朝からの——長い付き合いですから」

——ああ、馬鹿だ——

神子はそう思ってしまった。あの僧侶と同じような思考である。

映司は神子を下ろし、自分の後ろに下がらせる。勢いそのまま突っ込んだは良いが、戦う手段など持っていない。映司は懐にある二つに割れた赤いメダルに触れる。無い物ねだりなのだ。と承知しながらも、求めてしまう。オーズの力を、紡いだ絆を壊されない為に明日を迎える為の力が、欲しい。欲してやまない。

トカゲヤミーがこちらを睨み付け、再度突進しようとする。その瞬間、赤、黄、緑の三個の光が遙か遠方からやってきた。

『グオッ!?!』

光はトカゲヤミーを吹っ飛ばし、映司の元にやってきた。急の出来事にこの場に居

る全員が驚いている。

「取れってこと……?」

三色の光に運命的な物を感じた映司はそれを掴む、光は物質化し確固とした存在になる。

それは――

「コ、コアメダル……!?!」

鷹の紋章が刻まれた赤のメダル。

虎の紋章が刻まれた黄のメダル。

飛蝗（ばった）の紋章が刻まれた緑のメダル。

ヤミー同様、この世界には存在しない物。コアメダルだった。

――なぜ、なんで、そんな疑問が次々と浮かび上がる。しかし、今は――

「神子さん、下がっててください。ここからは、――俺が戦います」

映司は懐から黒を基調に青の幾何学的模様を持つ長方形の物体を取り出しながら言う。

「戦うって、どうやって……」

神子の問いに映司は答えず、長方形の物体を腰に取り付ける。物体から帯が飛び出て、映司の体に固定される。

更に映司は赤黄緑の三枚のメダル。タカメダル、トラメダル、バツタメダルを長方形の物体——オーズドライバーに嵌め込み、オースキャナーでメダルをスキャンしそしてまるで宣言するかのように叫んだ。

「変身!!」

——タカ!

——トラ!

——バツタ!

——タ・ト・バ!! タトバ、タツトツバ!!

映司の姿は変貌し、そこには、

どんな遠方からも獲物を発見できる鷹の目。敵を確実に仕留める虎の腕力。あらゆる物を飛び越える飛蝗の脚力。

それら全てを併せ持つ超人。——オーズ・タトバコンボが立っていた。



「なんだ……あれは……」

慧音も妹紅も神子も全員が驚愕した。当たり前だろう、一見普通の人間である青年が

奇妙な歌と共に三色の超人に変身したのだから。

「な、なんですか今の……歌?」

「あ、歌は気にしないでください」

映司——オーズはいつも通りの調子で言い、トカゲヤミーに立ち向かう。

「ハアアツ!!」

トカゲヤミーに数発のパンチとキック繰り出すオーズ。しかし、脱皮したことにより更に頑強になった鱗の鎧には効果は薄かった。

「か、硬い……ツ!!」

少し痛めたのか手をブラブラと振りながら言うオーズ。

——まずあの鱗をどうにかしなくちゃ……——

オーズは思考する。攻撃するにしてもあの頑強な鱗をどうにかしなくてはいけない、オーズはしばらく考え閃いた。

オーズは上空にいる妹紅と慧音を見上げる、この作戦には彼女らの協力が不可欠だ。

「すいませーん! ちょっと手伝って貰えませんかー!」

二人を見上げ手を振りながら協力を仰ぐオーズ。

二人にとっては正体不明な存在であるオーズ、しかし味方であることは間違いない。

彼女らは地上に降りた。

「なんか策でもあんのか？」

「はい。まずはあの怪物の一点に集中して弾幕を撃つてください、そこから俺が攻撃します」

「それでなんとかなるのか？」

「お願い、出ますか？」

「……これしか無いってんなら、やるしかねえな」

「あ、ありがとうございます!!」

二人はオーズの作戦に了承、まずは二人がスペルを発動させる。

「行くぞ妹紅!」

「ああ!」

——国体「三種の神器 郷」

——蓬莱「凱風快晴—フジヤマヴォオルケイノ—」

一点に向かって放たれる弾幕。頃合いを見計らってオーズは地面を叩きつけ、竜の顎を横した紫の斧——メダガブリューを取り出し、トカゲヤミーの腹部に斬りかかる。

「たあア!」

『グオオオ!?』

弾幕によって脆くなった鱗はメダガブリューの斬撃で鱗に包まれた柔らかい肉(?)

ごと切り裂かれた。傷口から血のように銀貨——セルメダルが溢れ落ちる。オーズは急いでセルメダルを数枚拾い上げ、メダガブリューにセットする。

——ゴックン！

——タトバ!!

「セイヤツ!!」

軽快なメロディと共にメダガブリューの刃が赤黄緑の三色の光に包まれる。そしてトカゲヤミーの傷口に強化されたメダガブリューが叩き込まれる。

『グウウウオオオ……………!!』

トカゲヤミーはだいぶ弱っている。オーズはトドメを刺すべくメダルを再度スキャンする。

——スキヤニングチャージ!!

「ハアアアアア……………!!」

オーズは上空に跳び上がり、跳び蹴りの体勢に入った。

するとオーズからトカゲヤミーに向かって三色の光るリングが現れた。オーズはリングに向かって蹴り進む、リングを潜るたびにその勢いは増していくそして、

「セイヤアアアアアアアア————ツツ!!!」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

必殺の飛び蹴り、「タトバキック」が叩き込まれた。トカゲヤミーは爆散し、その体を構成する大量のセルメダルが人里に降り注ぐ。

「倒したのか……?」

「どうやら、そうみたいだな……」

慧音の問いに妹紅は答える。怪我人の手当などやるべきことは沢山あるが、ひとまず人里の脅威は去ったのだ——

第004話 気絶と誤解と謝罪

◆ トカゲヤミーを倒したオーズは安堵のため息を吐き、後ろに居た神子の方へ振り返る。

「神子さーん、終わりま——ッ!?!」

なんと神子が倒れていた。オーズは変身解除も忘れ、彼女の方へ駆け寄る。慧音と妹紅も神子の異変に気付き、駆け寄った。

「神子さん!! しっかりしてくださいッ!!」

「おい大丈夫か!」

オーズと妹紅が声を掛ける、しかし反応が無い。オーズは最悪の結果を予想してしま
うが、冷静に神子の様子を見ていた慧音の言葉にそれは否定される。

「大丈夫、気絶しているだけだ」

「よ、良かった〜……」

本日二度目の安堵のため息を吐くオーズ。しかし、その瞬間——

——上空から蒼雷が放たれた。

「ぐああっ!？」

その雷はオーズに直撃する。

肉体的に強化されたオーズの皮膚には、この程度の雷はあまり効果は無い——ウヴァの雷の方がよっぽど堪える——が、油断しきったオーズは吹き飛んでしまう。誰もが新たな敵襲と感じ、身構える。その蒼雷の主はやはり上空に居た、しかしそれはヤミーでは無かった。

緑の衣に足はなく幽体。そう、神子の部下の——

「そこ」の鵠擬き……太子様に何をした……!？」

蘇我屠自古だった。敵意と殺意を露わにし、オーズを睨んでいる。

彼女はたまたま食料が切れたことに気付き、布都を連れて（無理矢理）人里に買い出しに来たのだ。しかし人里はトカゲヤミーの襲来によりパニック状態、嫌な予感が出た彼女は先に人里に来た神子を探しに——よほど慌ててたのか布都を置いてきぼりして——飛び出したのだ。そして神子は見つかったが倒れており、その隣には見たことのない妖怪——（オーズ）が——そう、基本的に短気な方だが冷静な判断力を持つ彼女らしかぬ早とちりをしてしまったのだ。激情に駆られ、妹紅や慧音も見えていない。

「もう一度言う……太子様に何をした……!？」

「ちよつと屠自古さ——」

「私の質問に答えろっ！」

何とか弁解しようとするオーズだが、屠自古は聞く耳を持たず再び雷を放つ。

「屠自古さん！ 俺ですっ！ 映司です！」

「なっ……!?!」

オーズは誤解を解くために変身を解除する。屠自古は目を見開き、驚いた。

しかし激情に駆られ、冷静な判断が出来ない状態である今の屠自古には火に油を注ぐことになってしまった。——結果、とんでもない勘違いをしてしまった。

「やはり貴様、最初から……!!」

「違います！ 誤解です誤解!!」

「黙れ！ 覚悟しろよ、この——」

そう屠自古は映司が最初から神子に危害を加える為に接触したと言う、考えに至ってしまった。

彼女は目の前の不屈き者を倒すべく雷を放とうとする。その時——

「おいおい、いい加減冷静になれって亡霊さんよ」

映司と屠自古の間に妹紅が立っていた。彼女は屠自古を若干睨めつけながら言う。

「コイツはアンタの太子様とやらの危害を加えてないよ、むしろ命を懸けて守ったんだ」

「なに……!?!」

「それに、ここ」（人里）での争い事は禁止だよ」

妹紅に宥められ、何とか落ち着きを取り戻した様子の屠自古。彼女は地上に降り、口を開く。

「だが……なぜ太子様が倒れている？ それにさっきのアイツの姿はなんだ……？」

「それはコイツの口から説明してもらうさ、なっ？」

「俺は良いんですけど……まずは神子さんを休ませないと」

そう、オーズやヤミーの説明をする前に神子を休ませなければならぬ。

「——なら、私の家を使うと良い」

その時、慧音が会話に入り込む。

「良いんですか？」

「ああ勿論だ。元々、外来人を泊めることもしてるしな。それなりに広いぞ」

「ありがとう、流石慧音だ」

「……礼を言おう」

神子を休ませる場所を慧音が提供し、映司達は慧音の家に行こうとする……が、屠自古は誰かを忘れていたような気がした。

そう、布都を忘れてしまったのだ。

「——うおーい！ 屠自古ーっ!!」

屠自古がそんなことを考えていると、布都がやってきた。飛ぶことも忘れ走って探してたらしく、息が切れ切れだ。

「ぜえぜえ……人里は騒々しいし、屠自古は急に飛び出すし……どうしたのだ? ——

——って、太子様ーっ!? 大丈夫ですか!」

布都は気絶している神子に気づくと慌てて駆け寄る。

映司はそんな布都を見ながら、微笑しながら言う。

「映司殿っ! 一体太子様はどうしたのだ!」

「えっと、色々説明しなきゃいけない事はあるけど……まずは神子さんを休ませなきゃね?」



慧音の家に着いた映司達は手頃な布団を敷き、神子を休ませる。

現在は居間に映司、妹紅、布都の三人が居た。家主の慧音は里を隠す為に出かけているらしく、屠自古は神子の付き添いだ。

「すまぬ! 映司殿! 屠自古を許してくれ!!」

妹紅から屠自古が映司にしようとしたことを聞いた布都は土下座をしかねない勢い

で頭を下げ、映司の許しを請う。二、三発打たれる覚悟であった。

しかし布都の覚悟に反し、映司は笑いながら快く許す。

「いや、全然怒ってないし気にしてないから頭上げてよ布都ちゃん」

「ほ、本当か!？」

「本当だよ」

布都は頭を上げる、殴られるかと思っていたのか若干涙目であった。

「本当すまない……屠自古は普段から短気な奴だがこうも激情に駆られるとは……」

屠自古の激情。長い付き合いでする彼女でも初めて知った面である。

「屠自古さんにとつて神子さんはそれくらい大切な人つてことだよ。じゃなきやあんなに怒らないよ」

そう、屠自古の激情は言い返せばそれほど神子を大切に思っているからだ。だから普段の冷静な判断力を失ってしまった。

「我も太子様への愛は負けてないのだが……」

「ははは……、競うようなモノじゃないと思うけど……」

(なんか羨ましいなあ……)

そういう話をしていると、意識を取り戻した神子が屠自古を連れ居間にやってきた。

「太子様! 大丈夫ですか!？」

神子を見るやいなや、布都は不安気な声で叫ぶ。神子は微笑みながら大丈夫だと伝える。

「大丈夫ですよ、布都。心配してくれてありがとう。さて——」

神子は映司と屠自古を見やる。

一方の屠自古はかなり気不味そうに映司を見ていた。

「大体の事情は屠自古の欲を聴いて分かっています。——屠自古」

「……先程は勘違いとは言え、危うくお前を殺しそうになった……すまない」

神子に言われ、屠自古は映司に歩み寄ったかと思うと頭を下げさっきの事に対してぶつきらぼうながらも謝った。

しかし映司はその事はもう既に許している。

「——全然気にしてませんし、それに屠自古さんは神子さんの事をそれだけ大切に思ってるってことですよ。次からは気をつけてください」

「……そう言われると助かる」

なんとか和解した様子の二人。

そして、映司は疑問に思っていたことを口に出す。

「そう言えば、なんで神子さんは倒れたんですか？ ヤミーの攻撃は受けてないはずなのに……」

映司が駆け付けた時、神子は何故か体調が優れなかったようだ。だが少なくともヤミーの攻撃を受けたよう見えなかった。しかし、先程彼女は倒れ気絶したのだ。

「——ああ、それは欲の聴きすぎで、ね……」

映司の疑問に神子はやや苦笑しながら答える。

「聴きすぎ……?」

「ええ、私は元から耳が良くてね。復活した後は更に良くなりました……こんな耳当てを付けなきゃならない程に。そして欲が聴こえる能力を持っているのは知っていますよね?」

「はい、でもそれが?」

「ようするにヤミーとやらの欲が大きすぎたんです。それで調子を崩してたところに君が持っているコアメダルの欲も大きすぎて……」

「なるほど……——えっ?　なんで神子さんコアメダルのこと……」

映司の疑問は氷解されるが、またもう一つの疑問が生まれる。

——神子にはコアメダルのことは話していいはず……。

神子はそのような映司の姿を見て笑いながら答えた。

「ふふふ、簡単な話ですよ。コアメダルの欲を聴いただけですよ」

「それって、人間以外にも通用する物なんですか?」

「勿論です。それにしても気絶してまで欲を聴いた甲斐がありましたよ、コアメダル……中々興味深い……」

神子の欲を聴く能力は人間や妖怪だけでなく、物にも通じる便利な力なのだ。

「——なあ、二人だけで盛り上がらないでくれよ……」

二人の会話に妹紅が口を挟む。

確かにコアメダルの事を知っている映司や神子はともかく、他の三人はそんなことまったく知らないのだ。現に布都などワケが分からずに映司と神子をキョロキョロと見ている。

「ははは……すいません、それではあの教師が帰りしだい説明しましょう。映司も頼みましたよ」

「分かっていますって」



そして数十分後。

里の歴史を隠した慧音が帰宅し、各々の自己紹介を済ませた後。オーズやコアメダルの説明をすることになった。だが、その前に人里の状況を把握することが先になった。

「慧音……どうだった？」

「ああ、あの怪物のせいで皆不安に陥っている……死人が出なかったのが幸いだな……」
盟約により安全が約束された人里。その人里に突如として襲来したトカゲヤミー。そもそもトカゲヤミーは見たこともない姿をし、殺す気で襲ってきた。

当代の博麗の巫女が生み出した「スベルカードール」。それは、「殺し合い」を「遊び」に転換させた画期的なモノであり今まで深かった妖怪と人間の溝を埋める切っ掛け——まあ、人間と妖怪は恐れ恐れられの関係が望ましいのだろうが——にもなり、幻想郷は文字通り楽園へと変わった。

しかし何百年振りに殺意を持ち、楽園に侵入した一つの異端がもたらした今回の騒動は、いくら基本的に凶太い幻想郷の人々でも不安に駆られてしまうのも無理のない話であった。

——そして、その異端を倒した外来人の青年。正直分らないことだらけだが、まずは青年こと映司に礼を言うのが先だ。慧音はそう考え映司の方へ振り向く。

「先程はありがとう、君のおかげだ」

「俺は自分出来る精一杯のことをやっただけですし、それに慧音さん達の協力が無ければあのヤミーは倒せませんでしたし」

「謙虚なんだな……だけど礼は言わせてくれ、私と妹紅だけではあの怪物は倒せなかつ

たからな……」

さて、映司。あの怪物や君が変化したあの姿、説明頼めるか？」

「はい、神子さんにも頼まりましたし。……えっとまずは」

映司はそう言い、長机に三枚のメダル、タカ・コア、トラ・コア、バツタ・コアを置く。

「これから説明します——」

第005話 解説とプロトタイプと興味

「まずはコアメダルの説明からですね」

慧音の家で開かれたコアメダルに関する説明。それには元からコアメダルを知っている映司と欲を聴きだした神子がすることになる。

コアメダルは八百年前、錬金術師達がとある国の王の協力の元、研究し造り出したモノだ。なぜ王がコアメダルの研究の援助をしたかと言うと簡単な話、利害の一致である。王はコアメダルの強大な力を欲していたし、錬金術師達は人造生命体を造ることが最大の目的だったからだ。

コアメダルは生物の力を極限にまで凝縮し純化させたモノである。コアメダルは全部で五種類、十枚ずつありその内の一枚を抜くことにより『10』と言う完全な数から『9』と言う欠けた数になり、メダルから『欠けた数を埋めたい』と言う欲望が生まれその結果——人造生命体、グリードが誕生する。

コアメダルは五種類存在するのだから必然的にグリードは五体居ることになる。

昆虫系グリード、『ウヴァ』。

猫系グリード、『カザリ』。

重量動物系グリード、『ガメル』。

水棲動物系グリード、『メズール』。

——そして鳥系グリード、『アंक』。——この時の映司の顔が哀愁を帯びたのは神子の気のせいだろうか——

グリードはそれぞれの生命の王であり、強大なパワーを持っていた。それこそ九枚揃った完全体の状態なら幻想郷の大妖怪達にも匹敵するであろうくらいの力を。更にグリードは人間の欲望を使いヤミーを生み出すことが出来る。

しかし、それでも敵わない相手が居た。それはコアメダルの力を自在に操る戦士——オーズ。

オーズはメダルを変える事によってあらゆる戦況に対応することが可能である、中でも同色のメダルを三枚揃える事により発動されるコンボは強力無比。オーズのコンボが全部で六つ。

オールマイティーなタトバコンボ。

雷と圧倒的な数で圧倒するガタキリバコンボ。

灼熱の光と俊敏性を持つラトラーターコンボ。

パワーと重力操作で敵を粉碎するサゴーズコンボ。

その身を液体に変え水中で力を発揮するシャウタコンボ。

空を音速で飛び炎の力で敵を焼き尽くすタジャドルコンボ。

王はオーズの力を使い、瞬く間に敵国を制圧しどんどん自国の領土を広げていった。だが、王は更なる欲望があった。

それは、神に近い存在に成ることであった。そして王はグリード達から全てのコアメダルを奪い、その身に取り込んだ。——しかし、それだけの力を受け止められるわけが無く王は暴走。グリード達を巻き込み、その体は石棺となった。それが八百年前の王の顛末——

そして八百年後、映司はふとした事からオーズの力を手に入れ、グリードの一体であるアंकと共に復活したグリード達と戦うことになったのだ。



「まあ、大体はこんなところでしょか」

コアメダルに関する説明を終え、喋り疲れた映司と神子の二人は出されたお茶を啜る。

「それで、それで映司殿は “おーず” に変身して復活した “ぐりーど” と戦ってたのだ

な？」

「う、うん。そうだよ」

布都が何故だか分からないがとても目を輝かせながら映司に聞いてくる。その様子に若干戸惑いながらも映司はちやんと答えた。

「……お前のことだからつきり怯えるかと思っただが……、意外だな」

屠自古が意外そうに言う。

実は布都は臆病な性格であり、妖怪は今でも怖いらしい。だから、今の様に興味津津な態度を取るのには正直意外であった。

「なにを言うか屠自古！ その身を変え、敵と戦う……カッコいいではないか!!」

「……ハアツ」

布都の言い分に屠自古は嘆息する。いつからそう言ったモノが好きになったのだろうか、元からだったのだろうか。

「だけど……ちよつとおかしいんだよね……」

映司が唐突に言う。

「おかしい？」

「はい、このコアメダルって今はもう無いんですよ」

そう、コアメダルは真木清人との決戦際、その余波により発生したブラックホールに

飲み込まれ全て消失——アंकの意味が入ったタカ・コアを除く——したはずなのだ。しかし、現にコアメダルは手元にある。

そんな映司の疑問に神子が答えた。

「ああ、そのメダルは君が使っていたメダルの『プロトタイプ』ですね」

「プロトタイプ……?」

「ええ、数多造られたメダルの一つです」

神子の話によると、コアメダルの完成にいくつもの試作品が造られた。しかし、殆どが力が足りなかったり物質化が出来なかったりと失敗続きであった。映司の持っているコアメダルもその試作品の一つだと言う。それらは全て処分され、永い時間の間に幻想郷に流れ着いたのだという。

だが、実際に使った映司が一番良く分かるのだがこのメダルはかつて使っていたコアメダルとなら変わらない力を出していた。そもそもそれ以前に三枚のコアメダルはなぜ、映司の元にやってきたのだろうか?

「でも、ちゃんと変身できたし、力が足りないようには思えませんでした……」

「確かに試作品のコアメダルではオーズに変身するだけの力は引き出せない。だけど今は変身できるくらいの力を持っている、それは——コアメダル同士が融合したからです」

再び神子の説明が始まる。

コアメダルの根源は『欲望』。力が足りずに廃棄されたコアメダル達にある一つの欲望が産まれたのだ。それは『力が欲しい』という欲望、その欲望によりメダル達は融合。三枚の充分な力を持ったメダルになったのだ。——グリードが生まれなかったのは所詮は試作品だからだろうか。

そしてその三枚のコアメダルが映司の所に来たかと言う、疑問は神子の推測によるとオーズである映司の欲望に感応し、やってきたらしい。確かにあの時、映司はオーズの力を欲していた。だから、コアメダルが来たのだろう。突飛な話だが、じっくりくる。

「さて、今度はこっちの質問に答えて貰いますよ映司」
「えつとなんでしようか……?」

「あの時はヤミーのせいで聞きそびれましたが、君の欲が聴こえない理由……教えてもらいますよ?」

「んなっ!？」

『欲が聴こえない』。その言葉に神子、映司、屠自古の三人以外が全員驚く(特に布都)。そして布都はしばらく考え込み、見当違いな答えを出す。

「なるほど分かったぞ!! やはり映司殿は高名な——」

「どう考えたって違うだろ。と言うか話をややこしくするなっ」

「あだっ!？」

屠自古は布都の頭に手刀を叩き込む。叩き込まれた布都はしばらくの間、唸っていた。

「しっかし、欲が聴こえないと言うのはおかしな話だよなあ？」

「ええ本当に。初めての件ですよ」

妹紅と神子の二人——あと屠自古も——はそう言うのと、早く説明しろと言わんばかりと映司を見る。

映司はその様子に苦笑いを溢しながらも説明を始めた。

「まず俺……少し前まで体にコアメダルが入ってたんですよ」

本日何度目かの衝撃発言。これについては神子も知らなかったらしく、皆と同様に驚いた。

「……………飲み込んだのか？」

「飲み込んでないですって」

つい出てしまった慧音の一言に映司がツツコむ。

「とにかく、そのコアメダル——紫のコアメダルは『無』の欲望を持ってたんです」

『紫のコアメダル』。それはコアメダルの欲を聴いた神子でも知らないことであった。

映司は説明を続ける。

「そして、欲望を無にする力もあるらしくて……だから神子さんの能力が通用しなかったんじゃないかって」

紫のコアメダルに備わる『欲望を無にする力』。だから、神子の欲を聴く能力はそれによつて阻害されていたし、コアメダルの欲を聴いても紫のコアメダルに関することは分からなかった。

「……今もその紫のコアメダルは君の体の中に？」

「いや、いまもう無いんですがまだその力が残つてみたいで……本当になんとなくですけど。」

そう紫のコアメダルは映司の体にはもう無い。

しかし、これは映司本人しかよく分からない事なのだが、まだ紫のコアメダルの力が自分の体に残つていいると言う感覚があるのだ。だからあの時、メダガブリューが顕現してきたのだ。

これで全ての説明が終わった。映司は残ったお茶を全部飲み干す。

そんな中、神子は映司を——本人に気づかれないように——じつと見ていた。映司の欲が聴こえない理由は分かった。だが、それゆえに彼の欲が聴こえないのが少しもどかしい、コアメダルの欲を聴いても分かったのは映司がオーズに変身しグリード達と戦つたと言う事ぐらい。詳しいことは映司の体に入っていた紫のコアメダルの力に阻まれ、

聴き取れない。——なんとというか、彼を火野映司と言う人物もつと知りたいたいと思ったのだ。オーズの強大な力を扱う映司がどういった欲望の元、グリード達と戦ったかと言う好奇心……それにあれだけの力を持つ人間を放っておくわけにもいかない。

などと考えていると不意に、不快感が神子を襲う。この感覚は先程経験した——
「ヤミー……!」

ヤミーがまた現れた事を意味するその言葉にこの場に居る全員がざわめきだす。映司は若干語気を強めながら神子に問う。

「神子さん! ヤミーは何処に!!」

「ここから東の——」

「分かりました! 皆さんは人里を頼みます!!」

言うがいなや映司は外に飛び出し、ヤミーの元に向かった。当然だが映司はこの辺りの地理はまったく知らない。

「映司っ!? ああもうっ! 布都! 屠自古! ここで待っててください!」

「た、太子様!!」

「私は映司を追いかけます!!」

そう言って、神子も外に飛び出してしまった——

第006話 戦う欲とブーメランと寝床提供

『ふむ……』

神子がヤミーを感知する少し前。

本来ならそこには人里があるはず、しかし現在は慧音の能力により、隠されただけの平原である。そこにあらゆる爬虫類の特徴を取り込んだかのような人型の橙色の異形が思案していた。

(ヤミーが何者かに倒された……どうということだ?)

グリードは自分が作ったヤミーの動向をある程度、感知することが出来る。橙色の異形がここに居るのも、自分が作ったヤミーが何者かに倒されたという事を感じ取ったからだ。

(幻想郷には我々とほぼ互角に渡り合う程の強者達が居るとは聞いたが……)

自分と黒色の異形を復活させた男の言葉を信じれば、その強者達ならあの程度のヤミー、簡単に倒せるだろう。だが、その強者達は自分たちのテリトリーからあまり出ないとも聞く。——まあ、その強者達がたまたま出向いていたと言う可能性も十分考えられるのだが。

しかし、自分の直感はやミーは幻想郷の強者達に倒されていないと教える。

(……確かめてみるか)

ヤミーを作り、そのヤミーが暴ればトカゲヤミーを倒した何者かは必ず現れるはず……。

橙色の異形はそう考え、適当な欲望を持つ妖怪か妖精を探しに行動を開始した。



走る。映司は走る。ヤミーの元へ向かうために。その時、後ろから声が掛かる。

「——映司ッ!!」

その声の正体は神子だった。飛んでいた神子は映司との距離を縮め、横に並ぶ。

若干、怒っているようにも見えた。二人は移動しながら会話を続ける。

「神子さんっ、どうして!」

「どうしてじゃないですよ!　すぐに飛び出して!　大体、君はここらの道を何も知らないでしょう!」

「ああ、すいません!」

先の戦いで「一人で無茶しなくても良い」と学んだ映司だが、染みついてしまった癖

みたいなモノは一朝一夕で抜けるようなものではない。

今回もついやってしまった。

「いやもういいです。ヤミーの居場所は分かっていますから早く行きましょう!」

「大丈夫なんですか! また倒れるかもしれませんよ!」

先程、ヤミーの膨大な欲を聴いてしまい気絶してしまった神子。そこが映司の懸念であつた。

「大丈夫です! 近づかなければ気絶はしません!」

「それなら、良いんですけど!」

二人は移動の速度を高める。五分くらい経つただろうか、神子が話掛けてきた。

「——こんな時に言うのもなんですが、君に聞きたい事があるんです!」

「なんですか?」

「私は君の欲は聴こえないつ、だから知りたいたいのです。——君は一体どんな『欲望』の元、外の世界で戦っていたんですか!! 聞かせてください! 君の欲の声を!!」

命を懸け、異形の者と戦う。それは生半可な思いでは成し遂げられない、かなりの覚悟が必要な事だ。だから、映司がどんな一欲望（おもい）の元、グリード達と戦つてきたのか知りたいのだ。こんな時に聞くべきことではないのは分かっているし、後で聞くことも考えた。——しかし、神子は今、映司の口で映司の声で知りたいと思つたの

だ。

そんな神子の問いに映司は答えた。

「戦う『一欲望（りゆう）』ですかつ、——俺はただ俺の腕が届く範囲の事を、自分が出来る事を精一杯やるだけですつ!!」

「その手が届く範囲より外はどうするんですかっ!」

「そこは神子さんや皆さんが頑張ってくれますよねっ!」

出会って数刻しか経つてないのに随分と信頼されているようだ。神子は思わず笑ってしまう。

「はははっ! 君のことが少し分かりましたよ! 君は——『馬鹿』だ!」

やはり、あの時感じていたがこの男は『馬鹿』だ。そうとしか言えない。

「えええっ! ば、馬鹿!」

「褒めてるんですよ! 映司! そろそろヤミーに近づいてきましたよ!」

「なんか誤魔化された気がしますけど、分かりました!」

そう言い、映司は腰にオーズドライバーを宛がう。オーズドライバーの両端からベルトが伸び、映司の体にしっかりと固定される。

映司はオーズドライバーに三枚三色のメダル、タカ・コア、トラ・コア、バツタ・コアを嵌めオースキャナーで掛け声と共にソレをスキャンする。

「変身ッ!!」

——タカ!

——トラ!

——バツタ!

——タ・ト・バ! タトバ、タツトツバ!!



人里を抜け、魔法の森へと続く街道。

ここでは人型のイグアナに人間の顔が付いた異形——イグアナヤミーと二人の妖精が争っていた。……正確には怪我をした緑髪の妖精を青髪の妖精が庇いながら戦っているのだが。

彼女らはいつも通りに遊んでいた所、「暴れたい」と言う欲望から産まれたイグアナヤミーに襲われたしまったのだ。その際に緑髪の妖精——大妖精が怪我をしてしまった。飛んで逃げられればいいのだが、見たこともない異形を目の当たりにしたせいか体が竦んでしまい上手く飛べない。だから青髪の妖精ことチルノが彼女を守りながらイグアナヤミーと戦っているのである。

「こんのーっ!!」

チルノの掌から氷の弾幕が放たれる。だが、その攻撃はイグアナヤミーの頑強な腕により、防がれた。イグアナヤミーはじりじりと彼女たちに歩み寄る。

「くっそーっ!! これでも食らええ!」

——雪符「ダイアモンドブリザード」

『グゴオオオオ……!?!』

強烈な冷気と共に先程のよりも強力な弾幕がイグアナヤミーを襲う。モチーフが爬虫類ゆえか強烈な寒さに弱いらしくイグアナヤミーは大きく怯み、体が凍りつく。

「どーだあ! あたいの力思い知ったかー!」

ふふーんと鼻を鳴らし、得意気にチルノは言う。

——しかし、イグアナヤミーは凍結しただけでまだ倒れていなかった。

「——チルノちゃんっ!!」

大妖精の叫びと共にイグアナヤミーが氷の戒めを砕き、咆哮を上げる。

確かに冷気には弱いがいグアナヤミーを仕留めるにはまだ威力が足りなかったのだ。

イグアナヤミーは勝ち誇るように再び咆哮を上げ、二人にじりじりと近寄り仕留めんとする。

——その時、

「——セイヤーツ!!」

「ハアアツ!!」

『グオオオオオツ!!?』

何もない虚空から突如として赤、黄、緑の三色の超人——オーズと神子が現われ、オーズはそのままイグアナヤミーに飛び蹴りをお見舞いする。——どうやら、強い力を持つ者なら隠された里から出ることは可能なようだ——その威力は中々大きかったらしくそれなりの重量を持つイグアナヤミーが大きく吹っ飛ばされる。

更に神子の掌から弾幕が放たれ、イグアナヤミーに追い打ちを掛ける。

「君たち大丈夫!?!」

オーズはチルノ達の方に振り向き、安否を確認する為に声を掛ける。いきなり声を掛けられびつくりしながらもチルノは答える。

「あ、あたいは大丈夫だけど大ちゃんがつ」

「分かった! 神子さんはこの子達を頼みますっ!!」

「分かってますよ!」

神子にチルノ達を任せると、オーズはイグアナヤミーに向かって駆け戦闘を開始する。神子も自分がヤミーに近づくとまた気を失う恐れがあるため、素直にオーズの頼みを了承した。

「セイツー！」

飛蝗の強力な脚力を宿した回し蹴りがイグアナヤミーの脇腹にヒットした。

攻撃に呻くイグアナヤミーにオーズは間髪入れずに虎の力が込められた爪状の武器

——『トラクロー』を展開し、連続で切り付ける。イグアナヤミーの体に火花とセルメダルが舞う。

『グガアアアアアッ?!』

(……何かおかしいな……?)

戦いながらオーズは違和感を感じていた。

——トカゲヤミーに比べ、イグアナヤミーは弱く感じる。

トカゲヤミーは殴った手が痛かった程に防御力が高かったのに、イグアナヤミーは全然硬くない。現に蹴りやトラクローで着実にダメージを与えている。

そんなオーズの疑問は神子の言葉により氷解された。

「——映司！ そのヤミーは脱皮をすることにより力が上がります！ だから早めに倒しなさい！」

「なるほど！ 分かりました！」

今は脱皮をする前の状態と言う所か。そうなら早いと、オーズは地面を叩きメダガブリューを召喚する。

「うおー!? 何だアレ! カッキー!!」

「チ、チルノちゃん……」

「能天気ですな君は……」

メダガブリューを見たチルノは彼女の琴線に触れたのか、「カッキー」と叫び大妖精と神子の二人は若干呆れている。

チルノは知らないことだが、紫のコアメダルは『氷』の力も宿している。だから、その紫のコアメダルによって造られるメダガブリューに同じ『氷』の妖精であるチルノは無意識にソレを感じ取ったのかもしれない。

ともかく、オーズはメダガブリューを手にイグアナヤミーに向かう。

——その時、

『ウアアアア……』

「これはッ!」

銀色の欠片がばら撒かれかと思えば、そこから全身が包帯のような物に巻かれ、頭部にポツカリと黒い大きな穴が空いた怪物——屑ヤミーが十数体程、産まれた。屑ヤミー達はそれぞれオーズの動きを妨害するように動いたり、イグアナヤミーを守るために取り囲んだ。

「ああ、もう!!」

オーズは屑ヤミーの群れに向かってメダガブリューを一閃する。

屑ヤミーはスピード、パワーと共に最低クラスだが、耐久力が高くなにより数が多いのが厄介だ。現にメダガブリューの一撃を受けてもなお屑ヤミーはオーズに纏わりつく。

『グオオオオオオオオオオッ!!!』

そうこうしている間に、イグアナヤミーが脱皮を果たしてしまった。

『ガアアアアアアアアアアアッ!!!』

「ぐあああっ!?!」

イグアナヤミーは脱皮前より数倍に増したスピードでオーズに向かって突進し、その勢いのまま拳のラツシュを掛ける。

オーズの胸部から火花が散り、吹っ飛ばされてしまう。

「ぐっ……!?!」

オーズは体を起こし、イグアナヤミーと屑ヤミー達を見やる。

他のメダルがあれば対処できるかもしれないが生憎、持っているのはタカ、トラ、バツタの三枚のみ。正直、まずい状況である。

オーズがこの場をどう切り抜けるか思考を張り巡らせていた。その時、オーズの後方から弾幕が飛んだ。

——秘宝「斑鳩寺の天球儀」

その弾幕は屑ヤミー達に当たり、屑ヤミー達はあっけなく消滅した。屑ヤミーは打撃みたいな物理的な攻撃には強いのだが『クワガタホーン』による電撃など特殊攻撃には滅法弱いのだ。

弾幕を放った主である神子はオーズの傍に近寄る。

「大丈夫ですか、映司?」

「み、神子さんまた倒れたら……!」

自分より他人の事を優先する映司の言動に若干笑みを零しながら神子は言う。

「遠距離から戦えば気絶する心配はありません。——それに、君は『自分の手の届く

範囲より外は私達がなんとかしてくれる』って言いましたよね? なら、今がその時で

す!」

「ははは……そう、ですなっ!」

オーズは思わず笑う。神子も自分ができる事をやろうとしているのだ。

「でも、あの子達は……」

神子の加勢は嬉しいが、チルノ達の事が心配だ。

「あの氷精なら大丈夫でしょう、ほら」

神子に後ろを見るように促され、オーズは後ろを見る。そこには鼻をフンフンと鳴ら

し、気合十分と言った様子の——恐らく神子に大妖精の事を任された——チルノが居た。まあ、屑ヤミー程度なら遅れは取らないだろう、——大妖精は心配そうにきよろきよろしてたが。

とにかく反撃開始である。

神子は弾幕でイグアナヤミーと屑ヤミーを牽制し、あの間を縫うようにオーズが駆ける。オーズが狙うのは勿論、イグアナヤミーだ。しかし、そうはさせまいと屑ヤミーがオーズに纏わりつこうとする。だが、

「ハッ！」

バツタレツグに力を籠め、オーズは飛蝗の驚異的な脚力を利用した大跳躍を行い、屑ヤミーの群れから脱出する。

「隙あり、ですな」

——眼光「十七条のレーザー」

そしてオーズが脱出した事により、一瞬の隙が生まれた屑ヤミー達を神子はソレを逃さずに攻撃。屑ヤミーは全滅した。残るはイグアナヤミーだけである。

「ハアアッ!!」

オーズはイグアナヤミーの胸部をメダガブリューとトラクローを織り交ぜ攻撃する。攻撃を一点に集中させ、イグアナヤミーの装甲を砕く戦法だ。しかし、そう簡単には

させないイグアナヤミーだ。

『ガアアツ!!』

「ガツ……!?!」

イグアナヤミーはオーズの腹に剛力の拳を叩き込む。体の中の空気が抜ける感覚が襲う。

「セイー! ヤアツー!」

『グガツ!』

だが、負けじとオーズも力を込めたメダガブリューの一撃を食らわし、オマケにトラクローで×の字に切り裂く。更に神子も弾幕で攻撃する。イグアナヤミーの頑丈な鱗の鎧は確実に壊れつつある。

『ウガアア!!』

「うわあああああああアツ!?!」

そのことを察したイグアナヤミーは奇声を上げながらオーズの首根っこを無理矢理掴み、軽々とぶん投げる。

「あいたたたた……」

「——映司」

投げられた際にぶつかつたと思わしき後頭部を一擦(さす)るオーズ。

その時、空からオーズを援護していた神子が降り立つ。

「神子さん……どうしたんですか？」

「少し、耳を」

「？」

言われるがままにオーズは神子の口に耳——オーズの状態では見えないが——を寄せる。

そして、神子の言葉に少し驚きながらもその提案に乗った。

「——出来ますか？」

「やってみます！」

オーズはそう言うと、トカゲヤミーを倒した際に念の為にと数枚拾っておいたセルメダルをメダガブリューに『食べさせる』。

——ゴツクン！ タトバ！

メダガブリューに三色の光が宿る。そしてオーズはそのままイグアナヤミーに切りかかるのではなく、

「セイヤツ！」

「なんだとーっ!？」

ブーメランのように“投げた”。

——タトバキツクとメダガブリユ。この二撃はほぼ同じタイミングにイグアナヤミーに炸裂。

当然、この破壊力にイグアナヤミーは耐えきれぬわけがなくセルメダルを散らばしながら爆散した……………。



その後、チルノがオーズに向かって「勝負しろー!」と騒いでいたが、大妖精に諭され勝負はお預けになり渋々と自分の住处に帰って行ったチルノ。大妖精はオーズと神子に丁寧にお礼を言いチルノの後を追った。このやりとりだけで二人の関係が窺われる。

オーズは変身解除し、映司に戻る。

「映司、君はこれからどうするのですか?」

映司の答えは決まっているだろうが、あえて聞いてみる。

「俺は幻想郷に残って、ヤミーと——そしてグリードと戦います……が」
「が?」

妙に歯切れが悪い。どうしたのだろうか。

「どこに住みましよう……!?」

「あ……」

映司は野宿には慣れてる。しかし、幻想郷の野宿はかなり危険だ。そこらへんの危険性は神子からちゃんと聞いている。人里の宿泊施設を利用するために職でも探そうかと映司が考えていた時、神子が口を開く。

「——それなら、私の道場に住みなさい」

神子からの提案に映司は目を丸くする。

「え……? い、良いんですか?」

「はい、一人くらいなら大丈夫ですし。それに——」

「それに?」

「現状、ヤミーを感知出来るのは私だけ。そしてヤミーが出ると言う事はグリードが居るのでしょう? なら、私は幻想郷に住むものとして、この異変を解決するため君に協力しましょう。——なにより、君には助けられましたしね」

神子が映司に住居を提供した理由。トカゲヤミーに助けられたお礼をしたいのもあるが、ヤミーやグリードが居ると言うことはもうこれは異変である。それも今までの遊び半分の異変ではなく、かなりまずい方の。だからヤミーやグリードらにとって有効打であるオーズ——映司を野宿みたいな真似をさせるわけにはいかない。

——だつてなんかしそうですし。

神子の提案に映司は素直に喜ぶ。

「あ、ありがとうございます！」

「ええ、頑張りましょう」

そうすると隠されていた人里が見えた。恐らく、屠自古辺りが慧音に頼み込んで能力を解除して貰ったのだろう。

「——太子様っ!!」

そうしていると屠自古がやってきた。

若干、涙目な所を見るとかなり心配してたのだろう。屠自古は神子に抱きつく。

「太子様っ! ご無事でございますか!？」

「大丈夫ですよ、屠自古。また心配を掛けたようですね……」

「いえ……無事なら良いんです……」

(本当に仲が良いんだなあ……)

そういう事にはとことん鈍感な映司は後に非常に驚く事になるのだった……。まあ、今はこの話は置いておこう。

「と、屠自古。また我を……せえせえ」

遅れて、布都もやってきた。どちらも全速力で飛んできたのだが亡霊である屠自古は

疲れは存在しない、しかしそうではない布都は肩で息をしていた。そのことに気付いた屠自古は布都に謝った。

「あ、すまん……」

「すまん……では……ないだろ……ぜえぜえ」

ともかく、布都と屠自古が揃ったので、映司が神子らの道場に住むことを伝えることにする。

「布都、屠自古。我々に新たな仲間が入りましたよ」

「？」

「その名は——」

若干仰々しく振る舞いながら、映司に指差す。

「火野映司です」

「えっ」

「なっ」

その言葉に屠自古は驚愕し、布都は驚きながらも嬉しそうである。

そんな二人の様子を見ながら映司は改めて挨拶をした。

「えっと……しばらくの間ですけど……よろしくお願いします」

「うおおおおおおお!! か、か、歓迎するぞ映司殿——ッ!」

「うわわわわわわっ」

映司の手を取り、そのままブンブンと振る布都。よほど嬉しいようだ。その一方、屠自古は訝しみながら神子に話しかける。まあ、あれだけ怪しんでいた人物を急に引き入れると言ったのだから無理はないだろう。

「一体どうしたのですか？ 急に」

「幻想郷に流れ着いたグリード、そしてヤミーに対抗するには映司、オーズの力が必要不可欠だからです」

「それなら博麗の巫女の所にでも預ければ良いのでは？」

「これはもう異変と言える。なら、博麗の巫女の所に異変解決の要である映司を預けると言う屠自古の言葉はもつともである。しかし、

「あの巫女の事ですからめんどくさがって断りますよ……」

「あー……確かに……」

上記の理由から却下された。今代の博麗の巫女は相当な物臭なのだ。

「それに、彼には助けてもらいましたからね。その恩返しも兼ねて、ね」

「ふうむ……」

「納得してもらいましたか？」

「——いや、それが貴方の意思ならば私達はそれに従うだけです。ただ少しだけ気

になっただけです」

「……ふーむ」

神子は屠自古にずいっと顔を近づける。突然の事に屠自古は慌ててしまう。

「たたたたた太子様っ!？」

「たまにはわがママを言っても良いんですよ?」

そうは言うが上司にわがママを言うのも遠慮してしまう。それよりさつきから神子の顔が近い、嫌というわけでない、むしろ嬉しい。しかし、こうも見つめられると恥ずかしい。

屠自古は思わず顔を背けてしまう、背けた方向には――

「よろしく頼むぞーっ! 映司殿!」

「ちよつと布都ちゃん! 目がっ、目が回るうううっつ!」

布都が映司の両手を掴み、ぶん回していた。どこからそんな力が出てきたのだろうか。

「なにしてるんだ布都ーっ!」

「映司ーっ!」

驚く屠自古と神子。

二人は慌てて布都を止めに行った。

……あのあと、布都の大回転は屠自古に一発殴られ止まったらしい。そして、布都は神子から罰としてイグアナヤミーが散らばしたセルメダル拾いを命じられたという。



『まさか、オーズがこの幻想郷に現れるとはな……!』

オーズとイグアナヤミーの戦いの一部始終をこの橙色の異形は見ていた。その顔は驚きに染まっていた。

グリードは自分が発する欲の気をコントロールできる。だから、神子は気付かれずに済んだのだ。

『ともかくあの男に知らせた方が良いか……』

セルメダルに関しては別に動いていた黒色の異形が稼いでいる所だろう、自分が稼いだメダルはオーズ達にを渡してやる。男にはお咎めを受けるかもしれないが。

そう結論付け、橙色の異形はオーズのことを男に知らせるため、あの洞窟へと向かった……。

第007話 黄色のメダルと怒号と奪取命令

——映司が幻想郷での戦いを始めたその翌日、命蓮寺。

「ね、寝坊したっ」

朝、一寅丸星（とらまるしよう）が飛び起きる。

寅丸星は早起きな方である。これは生来の真面目な性格から起因するものであり、彼女は起床の時間に必ず起きる。それが、星のちよつとした自慢であった。

しかし、今回はその起床時間に起きれなかった。確かに昨日は人型のザリガニに人間の顔を付けたような怪物が命蓮寺を襲い、参拝者たちに危害を加えようとした為、戦いはしたが、別段そこまで疲れてはいない。妖怪の体力を嘗めてもらっては困る。

だったらなぜ、寝坊してしまったのかと言う疑問が尽きない。

「は、早く準備しないと」

だが、そんなことを考えている暇があるなら、早く着替えなどを済ませる方が先決である。星はそう考えた、その時——

「んっ」

右手に何かを握っている感覚がした。しかも、妙に温かい。

「これは……う？」

右手を開くとそこには、ライオン、トラ、チーターの絵が彫られた三枚の黄色いメダルが握られていた。

もちろん、星はこんなメダルは見覚えがない。じゃあなぜ星が持っているのだろうか、オマケにこのメダルからは妙な感覚がある。若干の熱を持っているのもそうだが、なによりこのメダルからは自分と近い——いや、もはや自分の体の一部と言っても過言ではないほどメダルから出る妖力は星の力と似ていた。それも寸分の狂いもなく同じだ。

なぜ、このメダルから自分とまったく同じ妖力が発せられているのかと考えるが、「そもそもそんなことより、早く、早くしないとっ！」

寝坊してしまった事を思いだし、星は慌てて着替えに入る。

不思議なメダルに関してはまだ後で考えればいいと結論付けた。



あのあと急いで着替え、星は命蓮寺の廊下を出来るだけスピードを高め歩いていった。走りたところだが、命蓮寺には廊下を走ってはいけないと言う決まりがある（聖発

案)。

当然、真面目な星はそのルールをちゃんと守っていた。

早く急がなければ、寝坊してしまった事なんて、みんなには——特に従者であるナズーリンには知られたくない。ただでさえしょっちゅう失くし物をしては呆れられているのだ。これ以上、主の尊厳を無くすわけにはいかない。

「……?」

そうしていると、倉庫がなにやら騒がしいことに気付く。何があつたのだろうか、もしかしたら昨日取り逃がしてしまつたザリガニ怪人がまた現れたのか? ともなく行つてみた方が良いだろう。

そう思い、星は歩を速める。もはや走っているのと同じだ。星は気付いてないが実は昨日の彼女より移動スピードがかなり速まっているのだ。——それに倉庫が騒がしいのに気付いたのも星の聴力が高まっているからだ——だからか、倉庫に付くにはほとんど時間が掛からなかつた。星は倉庫の扉を開け、入ろうとする。

「一体どうしたので——」

その時だ、倉庫から金属の光沢を放つ赤と銀の鳥が飛び出し、

『タカー』

「ぎゃん!?!」

星の額に思いつきりぶつかった。

当然ながら、かーなーり痛い……星は額を抑えながらしばらくの間、悶絶してたがすぐに復帰。改めて倉庫に足を踏み入れる。そこには――

「ぬはははー!」

「コラーっ! 待ちなさい! ぬえーっ!」

「はあ……」

見たこともない奇妙な柄の大振りof 剣を持ちながら走り回る一封獣(ほうじゅう)ぬえとそのぬえを怒りながら追い回しているぬえの姉ポジションがすっかり定着した一村紗(むらさ)――水蜜(みなみつ)、そしてその様子を見ながら嘆息しているナズーリンが居た。そして、何より目に付いたのは見覚えのない、大きな鉄の箱が鎮座していた。

三人と鉄の箱の周りには金属の光沢を放つ先程星の額に激突した鳥――良く見るとタカだ――以外にも同じように金属の光沢を持つタコやらバツタやらトラやらウナギやらクジャクやらが縦横無尽に駆け回り、飛び回っていた。からくりの類だろうか。混沌とした状況に星はただただ呆気にとられるしかない。

「――ああ、ご主人じゃないか。おはよう」

星に気付いたナズーリンが声を掛ける。事情は知ってそうなので聞いてみることにする。

「おはようございますナズーリン。それで、どういった状況なんですかコレは……？」
「ああ、それはだな——」

星の質問にナズーリンは再び溜め息を付きながらも話し始める。

そもそも剣や鉄の箱の第一発見者はナズーリンであった。無縁塚にある小屋から命蓮寺に来たところ、ペンデュラムとダウジングロットが反応したため、気になり反応があつた場所つまり倉庫に言つた所、剣と鉄の箱、そしてさつきから動き回っているからくりの動物が変形する前の状態である鉄の筒が数個置いてあつた。

そこを掻き回したのがぬえであつた。彼女はナズーリンに悪戯するため、コツソリ後をつけていたのだ。そして、見たことのない鉄の筒やら箱が目映つたことでぬえの興味の対象はそつちに移り、勝手に弄り始めた。更に闖入者は現れた村紗である。

彼女は偶然にもナズーリンとぬえが倉庫に入つていくのを発見、その珍しい組み合わせに嫌な予感——保護者ゆえの勘だろうか——がした為、村紗も倉庫に入ったところ案の定、鉄の筒を弄繰り回すぬえとそれを傍観しているナズーリンが居た。村紗はぬえを止めようとしたが、時すでに遅し、複数ある内の赤い鉄の筒が変化したタカが村紗の額に直撃。それで今に至ると言うわけだ。

「——と言うわけなんだ」

「……ナズーリン、なぜ止めなかつたのですか……？」

「私がぬえを止められるとでも？」

「あー……彼女、聖か村紗以外の言う事、全然聞きませんしねえ……」

その聖と村紗でも言う事を聞かない事があるので、ぬえの扱いは結構難しいのだ。当のぬえはまだ村紗と追いかけてこの最中である。

「しかし、なぜこんなものが一ウチ（命蓮寺）の倉庫にあるんだろうね？」

「確かに……」

ふとナズーリンが呟く。

それは星も疑問に思っていた。昨日まではあんな剣や鉄の箱は無かった。命蓮寺の誰かが無断で入れたと言うことも考えられるが、剣や鉄の筒はともかくあのいかにも重そうな鉄の箱は一人では運べないだろう。——まあ、聖なら出来るが大きい鉄の箱を運ぶのはかなり目立つだろうし、その線は無いだろう。

そうなると一体だれが置いたのだろうか？ 朝から疑問だらけだ。

見たことのない物と言えば、あの黄色のメダルもそうである。タカが激突したせいとその事を忘れていた。とりあえずナズーリンに相談してみよう。

「ああ、そう言えば……」

星は黄色のメダルを取りだし、ナズーリンに見せる。

「それは……？」

「私にも良く分かりません、朝起きたらコレを握っていたんです」

「ふうむ……」

ナズーリンは黄色のメダルの一枚——ライオンが刻印されたメダル——を手に取り、まじまじと見つめる。するとナズーリンの顔に驚きの色が現われた。

「——このメダルの妖気……主人のと同じだ……」

「ええ、私もそれが気になって……」

ナズーリンは腕を組み、しばし考える。

「まあ、気にはなるが別に害はなさそうだし、そこまで気にする必要は無いんじゃないのか？」

「そんな楽観的な……」

そうは言うが、手掛かりが何一つない以上あれこれ考えるのも無駄なのは確かだ。

「そんなに気になるならあの古道具屋の店主にでも聞けば良いじゃないか」

確かに……あの古道具屋の店主なら、このメダルの名称は分かるだろう。仕事が終わったら行ってみよう。星はそう考えたその時、ぬえの悲鳴が倉庫に轟いた。二人とも驚きその方向に振り向くと、

「——ぎゃあああああ————————————————————————ツツ!? ムラサ痛い! 痛い!」

「ぬーえーッ！ 反省したーッ!？」

「ご、ご、ごめんなさああああああああいつ!!」

とうとう村紗に捕まったぬえが、彼女にオクトパス・ホールドを決められていた。

……とりあえず、まずは彼女を止めよう。その後、聖に剣や鉄の箱の事を伝えよう、星はそう決めた。



星が飛び起きてから数時間後。仙界にある道場では映司が掃除に精を出していた、映司が申し出たのだ。住まわせて貰ってる身なのでせめてこれくらいの手伝いはしたいからだ。……それに掃除はアルバイトの経験から、結構得意だ。

映司が幻想郷でグリード達との戦いを始めてから一夜が過ぎた。あのあと、グリード達に拾われないようにとトカゲヤミーが散らばしたセルメダルも全て回収し、石箱に詰め、更に神子と映司以外触ることすら出来ないように嚴重に封印を施し、今は神子の自室に隠してある。そこまでやる必要はないんじゃないかと映司は思ったが念には念をらしい。

「——精が出ますね、映司」

そうしていると神子がやってきた。

「神子さん。いや、これくらいの手伝いはしないと……」

「律儀なんですねえ……君は。ああ、そうだ君に渡したい物があるんです」

そう言うと、神子は札の様なものを渡す。

「これは……?」

「これは君一人でこの仙界と幻想郷の行き来を可能にする道具です。あつたほうが良いでしょう」

「ありがとうございます！ 神子さん！」

神子にお礼を言いながら映司はその札をハデハデな柄のパンツに一包（くる）み懐にしまった。当然ながら神子はギョツとする。

「パ、パンツ……?」

「大丈夫ですよ！ ちゃんと洗ってますから！」

どこことなくずれている映司のフォローに神子は溜め息を吐くしかない。

——と言うか何枚持つてるんだパンツ。

「と言うかまだ持つてたのですね……」

「当たり前です！ 俺の明日ですからっ」

もうパンツに關しては氣にしたら負けだ、神子はそう結論付ける事にした。

「まあ良いです……映司、その札のテストも兼ねておつかいに行ってくださいませんか？」

「分かりました。それで何を買ってくれば良いんですか？」

「今日の夕餉の食材を買ってきてください。詳しい事はこの紙に」

そう言って、買うべきものが記された紙を映司に渡す。

「札を持つて念じれば人里に行けます」

「分かりました、それじゃ行ってきます」

映司はそうじよう。すると映司の体がスウツと薄くなったかと思うと完全に道場から消えた。仙界から幻想郷に移動したのだ。

「どうやら成功したようですね……」

神子が安堵の溜め息を吐く。

実は札が完成した際、神子自身で一度試してみたのだ。その時は成功したが、仙術を学んでいない人間がちやんと移動できるのか不安だったが、どうやら杞憂のようだ。

不安も解消した神子は自室へと帰って行った。

——そして一時間後。

「おかし……」

自室で神子が頭を抱えながら呟く。

なにがおかしいのかと言うと、映司が幻想郷に行ったきり帰ってこないのだ。もう一

時間も経つ。そんなに時間の掛かる買い出しじゃないはずだ。だったら何故だ、まさか

(まだそうと決まったわけではない……)

最悪の考えがよぎってしまいが、振り払う。ともかく映司を迎えに行かねば。

神子はそう思い立つとたまたま自室を通りがかった布都に声を掛ける。

「布都」

「ん？ どうしたのですか太子様？」

「ちよつと映司を迎えに行つてきます。どうやら道草を食つてるみたいなので」

それだけ言うと、神子は足早に幻想郷へと向かつて行つた。



人里へと降り立つた神子は早速、映司の持っているコアメダルに宿る欲を聴くことにより映司を探すことにした。

コアメダルの欲が大きい為か、聴き取るのにそれほど時間は掛からず数分で済んだ。どうしたら映司は人里に居るようでひとまず安心した。

神子はその場所に行つてみるとそこには映司が居た。神子は本日二度目の安堵の息

を吐くが、映司の隣に居た人物を見てその息は止まってしまった。

「——ほんつとうにありがとうございます！——聖（・）さん！」

「いえいえ気にしないでください、好きでやったことですから」

そう、映司の隣に居たのは神子の商売敵とも言うべき人物。映司と似たような思考の僧侶。そして神子が最も苦手とする人物、

——聖白蓮だった……。

なぜ、聖が映司と一緒にいる？ というかなんであんな仲が良さそうなんだ？ 色々な疑問が次々に浮かぶ。そして、神子は映司の方に駆け寄り——

「エエエエエエエエエエ——————————ジイイイイイイイイイイツツツ

!!!」

力一杯、怒りの叫びを上げた……………。



映司が人里へおつかいへと行った同時刻。

「——コアメダルを奪え、だど？」

男と黒と橙の異形達がいる名も無き洞窟。橙色の異形は男の言葉は復唱する。

橙色の異形は先日、幻想郷にオーズが現われた事を男に知らせた。報告を受けた男は「そうか」と言うだけだった、やはりオーズが来る事を予想していたようだ。出会ってからまだ一日しか経ってないが、この男は本当に底が知れない、対峙すると総てを見透かされているような感覚すらする。不愉快極まりない。

セルメダルに関してはやはり咎められた。そして、その遅れを取り戻すべく男から言われたのがオーズのコアメダルを奪えと言うことだ。

「そうだよ、『ゴーシユ』くん。君は先日セルメダルを全然稼げなかつたからねえ」
子供に言い聞かせるように言う男。

「……分かつている」

橙色の異形、爬虫類系グリード——ゴーシユは静かに答え、この場から立ち去ろうとする男が男が引き留めた。

「待ちたまえゴーシユくん」

「なんだ……?」

「——もつと君の欲望を解放したまえ、君はグリードにしては妙に禁欲的だ。それとも……君の欲望はまだ見つけてないのかね?」

その言葉にゴーシユは若干の怒気を含めながら、

「——黙っている」

そう言い放つ。それに対し男は笑いながらゴーシユに小箱を投げ渡す。蓋を開けると光を内包した珠が入っていた。

「はははっ！ すまないすまない、お詫びにこれを持って行きたまえ」

「なんだこれは？」

「これは割る事により、一時的に異空間を生み出すことが可能な道具だ。上手く使えば一対一の状況に持ち込めるだろう。仙術を参考に私が造り出した」

「……」

ゴーシユは男の説明を聞くと、そのまま洞窟から去った。

男はその様子を見ながら笑みを浮かべる。

「頼むよゴーシユくん、"リフウ"くん。全ては君達と私の欲望の為に——」

第008話 潜む脅威とグリード邂逅と苦戦

「あーもうムラサのヤツ〜……」

命蓮寺の廊下をぬえが歩いていった。村紗のオクトパス・ホルドのせいか、体の節々がまだ痛い。

自業自得だし、ぬえもその事をちよつぴり反省はしているのだがいくらなんでもやり過ぎだ！　と言うのがぬえの言い分だ。気晴らしに外に出て誰かにイタズラを仕掛けてやろうかと思った時、

——不意に誰かの視線を感じた。

「？」

視線を感じた方向は天井。ぬえは上を見上げるが誰もいない。

ぬえは疑問に思いしばらく考え込むが、

「気のせいか」

自身の気のせいだと判断し、再び歩き出す。

誰も居ないはずの天井、しかしそこに異形が居た。ザリガニを人型にしたような異形が。

『『……………』』

——そうぬえが感じた視線は気のせいではなかったのだ。

ザリガニの異形、ザリガニヤミー——それも一体ではなく十数体も——は今は息を殺し潜んでいる。主の命があるまでひたすら隠れている。



トカゲヤミーの襲撃から翌日。

不安まだ残るが住民たちはいつも通りに暮らしていた。たくましいのだ——ここ（幻想郷）の人々は。そんな人里で怒号が響いた。

「——エエエエエエエエエエ——ジイイイイイイイツツ!!!」

怒声の主こと神子は映司に駆け寄り（チーターレグ並）そのまま聖から引き離す。そして胸倉を掴み、怒鳴り声を上げる。

「なにやってるんですか君はあああああああツツ!?!」

「み、神子さん……? ど、どうしたんですか……?」

神子の様子に若干怯みながらも映司はどうしたのかと聞いてみた。

「どうしたもこうしたもないですッ！ 聖白蓮はいわば私の商売敵なんですよ!! いくら君が聖白蓮のことを知らなかったとはいえッ！ なんであんな仲良くなってるんですかああああーッッッ!?!」

「み、みこ、神子さんッ！ お、おち、落ち着いてーッ?!」

映司の胸倉を掴みながら、前後に激しく揺らす神子。

……なるほど、神子と聖はそんな関係だったのかだつたらある程度の納得はつく。しかし、そこまで過剰に反応するものなのだろうか？ そこが解せない。

ともかく、神子をどうにかして落ち着かせなければ、しかしどうやって落ち着かせようか……映司が考えていると、渦中の人物である聖が二人に声を掛ける。

「まあまあ、ひとまず落ち着いてください神子さん。火野さんも困ってますよ?」

「貴方が——」

「このままだと火野さんもお話できませんし……だからまずはその手を除けましょう?」

「ぐぬぬ……」

聖は神子を諭すように言う。

確かに聖の言うとおりだ、このまま怒っていても仕方がない。いったん冷静になるべきだ。神子はそう結論付け映司から手を離す。

「すみません……少し取り乱してしまいました……」

神子は落ち着くために一つ深呼吸をし、

「——でも、理由はキチンと聞かせてもらいますよ?」

冷静なつたあとはややねめつけながら映司に問い詰めた。

「分かつてますつて、ハハハ……」

その様子に映司は苦笑するしかなかった。



話は一時間前に遡る。

「あ、あれ……?」

映司は見たこともない建物——良く見れば寺のようにもみえる——の中に立っていた。
た。

おかしい、神子の話だと人里に行けるようにされていたハズなのだが……。どうい
ことだろうか?

ともかく土地勘もない映司が下手に動けば迷うハメになる、その前にまた仙界に帰つ
て神子にこのことを話そうと思つたとき、

「——誰ですか？ 貴方は？」

後方から声が掛かる、映司が後ろを振り向くと不思議な髪の女性——聖白蓮が不思議そうに映司を見ていた。

……まさか、見られた？

「えつと……見えました……？ さっきの……？」

「はい」

……どうしようか？

隠すべきか……？ いや素直に話そう。幻想郷の住人なら信じるだろうし、なにより隠すようなやましいことはなにも一つないのだから。

「俺は火野映司。外来人ですけど今は神子さんの道場でお世話になってるんです。それで、その神子さんに買い出しを頼まれて人里に行こうとしたら何故かここに来ちゃったんですよ」

「つまり迷子ってことですか？」

「はい、そういうことになりますね……」

この年になって迷子は中々恥ずかしいが、事実なのが悲しい。

そのことを聞いた聖は「ふむ……」と少しの間考え、一つの提案を出してきた。

「だったら私が人里まで案内しましょうか？ 私もお夕飯の買い物をしなきゃいけません」

「ので」

彼女の好意を無碍にするわけにもいかない。

映司は聖の提案に乗ることにした。

「えっと、それじゃお願いします」



「——と言うワケで……それで聖さんの買い物も手伝ってたら、遅くなっちゃって……すいません」

「いやもう気にしてません。それより謝らなければならぬのは私の方です、まさか失敗作を君に渡すとは……」

遅れたことに関してはもう気にしていない。

しかし、やはりあの札は失敗だったらしい……自分の力にはそれなりに自信を持っていた神子はややショックを受けてしまう。

……しかし、なぜ失敗したのだろうか？ まあ、単に自分の力不足だろうか妙に引つ掛かる。神子はショックを受けた事など忘れ深く思考する。その時だ、聖が神子の口に何かを突っ込んだ。

「えいつ」

「むぐつ!？」

突っ込まれた物の正体は揚げ饅頭だった。それもアツアツの出来立てなので思わずむせてしまう。

「げほっ……ごほっ……何するんですか!？」

「考える時には甘い物が一番ですからね♪」

「だからつていきなり口に突っ込まないでください! 火傷しますよ!!」

「……アイスクャンデーを突っ込んだ方が良かったのでしょうか?」

「まずは突っ込む事から離れなさい貴方は!」

「それよりも冷めてしまいますよ? 揚げ饅頭」

「話をそらすなっ!」

聖がからかい、神子がそれをツッコむ。

傍から見れば仲が良さげにも見える二人の会話、商売敵同士には見えない。しかし、先程の神子の様子を見ると神子は聖が苦手なのだろうか?

映司は先程、聖から貰った揚げ饅頭を頬張りながらそんな事を思っていた。

——その時、神子の表情が変わった。

「——ッ!」

そして、それが意味するのは、

「映司っ！ ヤミーが現れました！」

ヤミーが幻想郷のどこかに現れたことだった。

「神子さん！ ヤミーはどこに、——ッ!?」

映司は神子にヤミーの所在を聞こうとした矢先、閃光が走る。

その眩しさに二人の視界は一時的に奪われた、そして視力が回復する頃には周りの景色は一変していた。

「……は……?」

映司は辺りを見渡す、さっきまで人里のはずなのに今は荒れ地になっている。

生き物の気配すらしない、映司と神子の二人だけだ。

「——恐らく仙術で異空間を造り出したのでしよう、気を付けてください」

困惑する映司に神子が説明する。

異空間の創造。それは仙術をある程度学べば使用できるわりと簡単な術らしい。もしそうならかなり厄介だ、敵に仙術を扱う者がいるのだから。

ともかく、まずはここから脱出するのが先決だ。この異空間が仙術により造り出された物なら同じ仙術でなんとかなるはずだ……神子はそう思いさつそく実行しようとその直後——二人は敵意と殺意を感じた。

『お前が今代のオーズか……』

敵意を放った主は二人の目の前に居た。

あらゆる爬虫類の特徴を取り入れたかのような橙色の異形。映司は外見的特徴から、神子はその異形が発するヤミーとは比べ物にならない強い、強い欲から即座に理解した。あれはヤミーではないあれはヤミーよりも上位の存在——

「グリード……!?!」

眼前に居る爬虫類のグリードは敵意を露わにしながら静かに佇んでいた。外の世界での戦いでもグリード達とは何度も相対した、どのグリードも生物の王の称号にふさわしいプレツシャヤーを発していた。そしてこの爬虫類のグリードも変わらないプレツシャヤーを持っていた。

爬虫類のグリードに神子は冷たい声で問う。

「君か？ 幻想郷にヤミーを放ったのは？」

その質問に爬虫類のグリード——ゴーシユは答えた。

「ああ、そうだ。ヤミーを作り、この幻想郷に放ったのは俺だ」

(……?)

あまりにあっさり答えるゴーシユに訝しげに思いながらも続けて問う。

「この異空間は仙術で造り出すモノなのだろう？ 君が造ったのか？」

『違う、使ったのは俺だがこの空間を造ることが出来る道具は違うヤツが作り出した』

——やはり仙術を知る者が敵側に居たのか……。

神子の予想は当たっていたようだ。

「そのヤツについても詳しく聞きたい所だろうが……君は答えないのだろうか？」

『当たり前だ。敵にそんな情報をやるほど俺は阿呆ではない。——さて、問答はも

う良いだろう？ 今代のオーズ、お前の持つコアメダルを貰うぞ』

そう言いゴーシユは構える。敵意も更に増した。

「やっぱりね！」

「相手はグリードです。油断は禁物ですよ」

「わかってますって！」

映司もオーズドライブを取りだし、変身の構えを取る。

「変身ツ!!」

——タカ!

——トラ!

——バツタ!

——タ・ト・バ! タトバ、タットバ!!

「ハアツ！」

変身したオーズは早速、ゴーシユに向かって駆け殴りかかる。

しかし――

「か、堅い……ッ！」

先日交戦したトカゲヤミーより遥かに堅い装甲を持つゴーシユ。逆に攻撃を仕掛けたオーズの拳が痛んでしまった。

『こんなものかッ！ 今代のオーズ！』

オーズに生じた僅かな隙をゴーシユは逃さずにオーズの胸部に向かって強烈な拳の突きを食らわす。

「ぐああっ!？」

たったの一発だがその威力は凄まじくオーズは吹っ飛び、近くにあった岩に激突した。

「映司ッ！ クッ！」

――眼光「十七条のレーザー」

神子はオーズ――映司を助けるべくスペルカードを発動させる。

ゴーシユに向かい、レーザーが襲い掛かる。

『甘い！』

だが、ゴーシユはその弾幕を腕をクロスすることにより防いだ。

「セイツー！」

オーズはメダガブリューを召喚し、ゴーシユに斬り掛かるがそれもゴーシユの亀の甲羅を模したかのような腕に防がれ、ダメージを与えるには至らなかつた。

オーズは反撃をくらう前にバツタレッグの跳躍で一旦距離を取り、後方にある岩を蹴りつけその勢いを利用した飛び蹴りを放つ。

—— 仙符「日出ずる処の天子」

神子もスペルカードを発動させ、オーズを援護する。

キツクはゴーシユの腹部に命中。更にそこを踏み台にしてゴーシユの背後へクルクルと飛び、すれ違い様にあらかじめ展開したトラクローとメダガブリューで斬りつけた。

そして地上に降りるとそのままメダガブリューを投擲。そのメダガブリューに向かって神子が弾幕を撃つことにより、メダガブリューに弾幕の力が宿る。

メダガブリューはゴーシユに向かって回転しながら飛び腹部に命中する。

『ぐおッ!?!』

初めてゴーシユの口から苦悶の声上がる。やっと堅牢なゴーシユにダメージが入ったのだ。

『……フンッ!』

「うわあっ!」

しかしその次の瞬間、ゴーシユはかぎした掌から大蛇を顕現させる。大蛇はオーズに巻き付き、主であるゴーシユの元へ引き寄せた。

苦手な蛇に巻き付かれて、若干怯んでいるオーズにゴーシユは容赦なく拳打のラツシユを叩き込み、最後に蹴りを決めた。

『ハアアアアアッ!!』

「ぐあああっ!?!」

火花を散らしながら吹っ飛ぶオーズ。

地面に激突し、ゴロゴロと転がりダメージの大きさに呻く。

「映司っ!?!」

神子は倒れたオーズに向かって叫ぶ。

『さて、コアメダルは頂くぞ。今代のオーズ』

「ぐっ……!」

そう言い、ジリジリと近寄るゴーシユ。立ち上がるにもダメージが大きく立つことさえままならないでいた。

ゴーシユに対しては神子の弾幕も蚊が刺す程度だろう。

まさに絶体絶命の状況であった。その時——

——光魔 「スターメールシユトロム」

ゴーシユ達の背後に弾幕が放たれた。

その攻撃が不意打ちだったためか、ゴーシユは弾幕を受けて僅かながらよろめいた。空から弾幕を撃った人物が降りてきた。

「——その人から離れてください」

その人物とはゴーシユに毅然とした目で見る不思議なグラデーシヨンの髪をした女性、——聖白蓮だった。

「なんで貴方が……っ!？」

神子が驚きながら当然の疑問を言う。

聖は微笑みながらその疑問に答えた。

「あの眩い光を見たと思っただらここに居たのですよ。それでしばらく飛んでいたら貴方達を見かけたんです」

異空間に閉じ込められたのは神子と映司だけではなかったのだ。

聖は説明を終えると、表情を真面目な顔に変えゴーシユを見やる。

「なぜ貴方はこの人達を襲ったのですか？」

『……コイツの持つ物が必要だからだ』

「そうですか……」

聖はそう言うと思議な形の巻物——魔人経巻を取りだし、構えを取る。

「——私は詳しいことは分かりません。でも、貴方を見過ぐすワケにはいきません！」
魔人経巻から光が輝き、スペルカードを発動させる！

——超人「聖白蓮」

第00⑨話 加勢とザリガニとラトラーターの力

——超人「聖白蓮」

スペルカードを発動したモノの、弾幕が現れない。その変わり聖の——オーラ、気とでも言えば良いのだろうか——力が倍増したのが分かった。

そうこのスペルカードは弾幕を放つものではなく、身体能力の強化を目的としたスペルなのだ。

「はッ！」

掛け声と共に聖は低空飛行でゴーシユに詰め寄り、胸部に向けて拳の一撃を放つ。が

「~~~~~ッ!?!」

衝撃が拳から全身に伝わり痛みと痺れで聖は涙目になる。

身体強化された聖の拳は鋼鉄をも貫く、が、ゴーシユのその頑強な装甲は貫けなかった。

聖は痛みを堪え、掌から弾幕を放ち神子達の元へ一旦距離を取る。

「痛いです……」

「ええっと、大丈夫ですか？」

「はい、ありがとうございます……っでもしかしてその声、火野さんですか？」

目の前に居るのは見知らぬ妖怪(?)。しかし、その声は先程会った映司そのものだった。

聖の疑問に映司が答える前に神子が答えた。

「そのとおりです、詳しい話は後程。しかし——」

神子が頭に手をやりながら考える。

まさか身体強化の魔法を得意とする聖ですらゴーシユにダメージを与えられなかったとは、怪力を誇る鬼か腕力を大幅に上げるゴリラのメダルがあればゴーシユに打撃攻撃でダメージを与えられるかもしれないが……。

——グリードの強大な力。

コアメダルの欲を聴いてグリードの脅威は分かってはいたがまさかこれ程とは思わなかった。

この状況を打破するにはオーズ、映司と不本意だが聖の力が必要不可欠だ。神子はまず先程、ダメージを受けたオーズに安否を聞く。

「映司、動けますか？」

「まだちよつと痛みますが大丈夫ですよ」

「良し……。——聖白蓮、貴方にも手伝ってもらいますよ」
「分かりました。何をすれば？」

「単純です。攻撃を——そう胸部に一点に集中させてグリードの装甲を貫きます」

ゴーシユが造り出したヤミーに対してオーズが行った戦法。ならゴーシユにも有効なはずだ。単純な戦法だと神子自身も思うが、現状の戦力ではコレが一番だ。

神子の案を聞いた聖とオーズは早速、ゴーシユに向かって駆け、狙いである胸部に蹴りを同時に入れる！

「ハアツ!!」

『又ウツ!?!』

二人の同時攻撃にはゴーシユも堪えたのか、大きく後退した。

——神光「逆らう事なきを宗とせよ」

そして神子がスペルカードを発動し、追い打ちをかける！

弾幕がゴーシユだけではなく地面にも多数、着弾したことにより砂煙が大量に発生しゴーシユの視界を一時的に奪った。

(ツチ……。今のコアメダル数では……)

ゴーシユは心中で舌打ちをする。

実はゴーシユはこういった視界が悪い状況でも大丈夫な能力を持っているのだが

……現在、ゴーシユに入っているコアメダルの枚数ではその能力が出せない。

ゴーシユは神経を集中しどこから攻撃が来るか探る。

「ハアアアツ!!」

早速、その攻撃はゴーシユの真横からやってきた。

聖が煙に紛れてゴーシユに勢い良く蹴りを繰り出した。大木ならまるで爪楊枝のよう、簡単にへし折る威力を秘めているがそれでもゴーシユの腕の盾に容易に防がれてしまう。

『分かってはいるだろう？ お前の攻撃は効かんツ!』

「そんなのは百も承知です!」

聖がそう言った次の瞬間――

――ゴックン! タトバ!

――秘宝「聖徳太子のオーパーツ」

セルメダルを入れ威力が大幅に上がり更に、弾幕の力が上乗せされたメダガブリューを持ったオーズが聖に気が向いていたゴーシユの胸部に向かい振る!

これは先程、オーズと聖がこっそり立てた作戦であり聖がゴーシユを引き付け、その隙を狙ってオーズが強化されたメダガブリューで攻撃するという物だ。神子は知らされてなかったが聖の欲を聴いて勘付いたのだろう。

『チイイツ!!』

さすがに「アレ」は喰らうとまずいと判断したゴーシユは後方に飛び退く。「無駄に頑丈な君でもあの攻撃を喰らうのは拙いようだな?」

それを見ていた神子が嫌味気にゴーシユに言う。

——オーズはその様子がまるでアंकクに見えた。が、神子には秘密である。

『……そうだ、完全体にならまだしも、今の状態ではあの攻撃は防ぎきれん……』

ゴーシユは神子の言葉に怒るどころかむしろ冷静だった。

「流石にあんな安い挑発には乗らないか……」

『当たり前だ。——さて、退かせてもらおう……この状況でコアメダルを奪うのはリスクが高いからな』

「なっ、待て!」

そう言い、ここから立ち去ろうとするゴーシユ。

神子は追いかけてようとするが突如閃光が走り、三人の目を眩ます。視界が回復する頃にはゴーシユの姿はいなく、周りの景色も荒れ地から人里——と言っても先程まで居た場所ではなく、人目の付かない路地裏のような所だが——になっていた。そう幻想郷に戻ってきたのだ。

「戻って……来たのでしょうか?」

「そうみたいですわね……」

聖とそう会話しながらオーズは安堵のため息を吐く、もし聖が来なかつたらコアメダルは全部奪われていただろう。

今、明日を迎える為にはオーズの力は必要不可欠だ。だから聖にはお礼を言わなければならぬ。

早速、オーズは変身を解除し聖に礼を言う。

「さつきはありがとうございます、聖さん。おかげで助かりました」

「いえいえ、私は当然のことをしたまでです」

ニコツと笑いながらそう言う聖。

「……本当に人が好いんですね貴方は」

「ええ、困った人を助けるのは当たり前のことです」

「ハア……」

神子が皮肉気に言うが、聖は真っ直ぐと返した。そんな聖を見た神子は嘆息する。

——聖のそういう所が神子は苦手なのだ。まあ、他にも苦手な所はあるのだが。

一方、聖は何かを思いだし、口を開いた。

「——ところで、さつきの火野さんの姿は一体？」

「ああ……」

オーズとしての映司の姿やグリードを実際に見た聖には説明した方が良いだろう……。

そう考えた映司と神子はオーズやグリード、そして昨日起きたことについての軽い説明をした。——神子は不服そうだったが——

「なるほど、昨日、人里を襲った怪物を退治した妖怪は火野さんだったんですね」

「知ってたんですか？」

「ええ、命蓮寺は人里に近いですから情報はすぐに来るんです。——あ、怪物と言えば……昨日、命蓮寺にも怪物が出たんです」

「!?!」

二人はその事実には驚愕する。人外が存在が浸透している幻想郷で怪物と呼ばれるのはヤミーくらいいしかない。映司は驚きながらも聖に詳しいことを訊ねる。

「そのこと、詳しく聞いても良いですか？」

「分かりました」

聖によると昨日の朝方、ザリガニのような怪物が突如として現れ、命蓮寺を襲ったと言う。

怪物は複数体居たものの一匹一匹はあまり大した強さではなく、また参拝者の数が少ない朝だったため被害は殆ど無かった。

だが、その怪物の一体が逃げてしまったのだ。聖たちもすぐに後を追いかけたのだが、見失ってしまった。

「そのあと人里のことが心配になって向かってみたのですが、着いた時にはもう上白沢さんによって里が隠されていました」

「ふむ……」

聖に事情を聞き、神子は深く考え込んだ。

まさか、商売敵の所にもヤミーが現れていたとは……それよりも気になるのは命蓮寺に現れたのはザリガニのヤミー、爬虫類のヤミーではないのだ。先程、遭遇したゴージュは見た目から察するに爬虫類のグリードだ、爬虫類のグリードからザリガニ——甲殻類のヤミーは造れない。これが意味するのはゴージュ以外にもグリードがもう一体居るといふことだ。

そしてもう一つ気になることがある。ザリガニヤミーが命蓮寺を襲ったのとトカゲヤミーが人里を襲ったのはほぼ同時刻だろう。欲を聴き取ると言う自身の能力のおかげで欲望の塊とも言えるヤミーが暴ればすぐにソレを感じ取れる。だから、トカゲヤミーとザリガニのヤミーことザリガニヤミーがほぼ同じ時間に暴れたのならあの時、トカゲヤミーだけでは無くザリガニヤミーも感じ取れたはずだ。しかし感じ取れなかった。

——まあ、トカゲヤミーに気をとられてザリガニヤミーを感じ取れなかったのだろうが妙に腑に落ちない。

神子はそんな疑問に対して色々考えながら聖の居る方向に向いた。そこには、

「……………」

「何やつてるんですか貴方は……………」

棒付き飴を持ちながら妙にソワソワしている聖の姿があった。

「い、いや何でもありませんよ?」

「それじゃあなんで貴方は棒付き飴を持ちながらソワソワしてるんですかね?」

「……………あ、そういえばお買い物した物、あそこに置きっぱなしですよね?」

「あからさまに話を逸らすな……………!」

「まあまあ……………」

そんな聖に神子は憤り、映司が宥める。確かに買った物は回収しなくてはならない……………昼食、夕飯抜きはさすがにキツイからだ。

感じ取れなかった事や逃げた一体のザリガニヤミーなど気になる事はあるが、ひとまずはソレを先決することにした。

その時——

「聖さま! やつと見つけました!」

上空から命蓮寺の入門生である山彦——幽谷（かそだに）——響子（きょうこ）が降りてきた。

しかし、息が切れ切れで非常に慌てている様子だった。

「あら、響子ちゃんどうしたの？」

聖の問い掛けに響子は息を整えながら、衝撃的な事を口から開いた。

そしてソレと同時に、

「みよ、命蓮寺が昨日のと同じ怪物に襲われましたっ!! それもたくさん!」

（ヤミーッ!）

神子がヤミーを感じ取った。

聖は命蓮寺襲撃の知らせを聞いた瞬間、顔色を変える。

「今は寅丸さま達が食い止めてますが——」

「ッ!」

「えっ!? ああ! 聖様!」

響子が言い切る前に聖は全速力で命蓮寺に向かって飛んで行ってしまった。響子も慌てて聖を追いかける。

「行きましよう神子さん!」

「分かってます……」

神子としては正直、商売敵を助けるのはかなり抵抗があるがヤミーが関係しているのなら話は別だ。

映司と神子はザリガニヤミーに襲撃されている命蓮寺へと向かった。



——転覆「沈没アンカー」

——鶴符「弾幕キメラ」

『『グギャアアアアアアアッ!?!』』

弾幕が直撃し、数体のザリガニヤミーは無数のセルメダルになる。

しかし、周囲を見渡すとまだまだザリガニヤミーは大量に居る。

「あーもうキリがなーい!」

ぬえがそう毒づく。

事の始まりは十分程前、ぬえが出かけようとした矢先にザリガニヤミーが命蓮寺を強襲した。しかも今回は以前とは比べものにならない程の数だ。ざつと見渡しただけでも五十体は居る、命蓮寺の中にも居るのでザリガニヤミーの数は百体は越えているだろう。

このザリガニヤミー、一体一体は大したことはないのだがとにかく数が多い。まるで無限に居るのかではないのかという錯覚すら覚える。

一応、響子に聖を呼ぶように向かわせたが、聖が来るまでに持ちこたえられるだろうか。

「愚痴ってる暇があるならほら、戦う！」

そんなぬえにアンカーを振り回しながらムラサは櫓を飛ばす。

少し離れた所では星が長槍を振るい、ザリガニヤミーを応戦していた。

「ふんっ!!」

槍が風切り音を鳴らすたびにザリガニヤミーは四散していく、更に弾幕も放ちザリガニヤミーを次々と撃破する。

獅子奮迅の活躍を見せる星であったが、肩で息をしており酷く体力を消耗しているのが分かる。倒しても倒しても減る気配がしないザリガニヤミーにみんなが疲れているのだが、特に星は率先して戦っているため一番疲れているのだ。

しかし、それでも槍を握り戦おうとする。

「ッ!? ご主人!!」

刹那、疲労状態の星の僅かな隙を狙って一体のザリガニヤミーが飛び掛かった! ナズーリンやムラサが叫ぶが、ザリガニヤミーはもう回避できない距離まで迫ってきてい

た。

星は来るであろうダメージに備えたが――

「――星ッ!!」

誰かに突き飛ばされ、ザリガニヤミーの攻撃は星には届かなかつた。ムラサとぬえの悲鳴交じりの声が聞こえる。星は突き飛ばされた方向に振り向いた、そこには聖の姿があつた。

「ひじ、り……?」

先程まで星が居た地点には聖が居て、その隣にはザリガニヤミー。更にぬえとムラサの悲鳴。

そう、聖は星を庇つたのだ。

「聖……」

気を失い、倒れこんだ聖に星は力無く呟く。次にザリガニヤミーを見やり憤怒の表情を刻んだ。

――貴様はッ!! 貴様らはッ!!

――この人に、この人に何をしてくれたんだッ!!

ゆっくり立ち上がり、ザリガニヤミーを睨めつける星。

「ご主人……」

星の尋常ではない様子を見てナズーリンが不安気に呟いた。星は基本的に穏やかだが地の性格は激情家であり、身内を傷つける者などにはその一面を見せたりするし、ナズーリン自身も何度か見た。

——しかし、今回は本当に普通ではない。どう言えば良いのか分からないのだがとにかく今の星の様子は尋常ではないのだ。それはムラサ——ザリガニヤミー達の注目が星に集まっている隙に聖を抱えている——とぬえも感じ取っているようだ。

刹那、星の懐からライオン、トラ、チーターが刻まれた三枚の黄色いメダルが飛び出る。そのメダル達は星の周りをグルグルと回り星の体に入り込んだ。

——ライオン！

——トラ！

——チーター！

——ラッタア、ラッタア！ ラトラーター!!

どこからか珍妙な歌が響くと共に星の体に変化していく。

金の瞳は水色に染まり、髪は獅子の鬣のように逆立つ。腕部は服の袖を突き破りながら隆起していくその見た目は虎の腕そのものだった。足も嫌な音を立てながら一狩猟豹（チーター）の脚になる。

今の寅丸星の姿は異形そのものだった。

「……そこに気絶している聖白蓮とあの寅丸星の姿……詳しい説明をお願いしますよ？」

「寅丸さんって……ッ!？」

「どうして寅丸さまが……ッ!？」

神子がムラサに説明を求める。神子の言葉により異形の正体が聖の話で出た寅丸星だと分かり、映司は更に驚く。響子など若干パニックに陥っている。ムラサは神子の物言いに少しムツとくるも話し始めた

「あの怪物にやられそうになった星を聖さまが庇って……それに星が怒ったと思ったら黄色いメダルが飛び出てそのメダルが星の体に入ったら、星があんな姿になったのよ」

今日は驚くことばかりだなあ……と映司は心の片隅で思う。ともかく、黄色いメダルと言うのは十中八九コアメダルのことだ。つまり今、星が発揮している力はラトラーターみたいではなくラトラーターの力そのものなのだ。

「とにかく、止めないと!」

色々疑問は尽きないが今は星を止めるのが先決だ。

今の星は半ば暴走している状態だ。今はザリガニヤミーと戦っているが、ナズーリンやムラサに攻撃を加える恐れがある。

『暴走』することの怖さは映司自身が身を持って知っている。だから、止めなくてはな

らない。そう思いながら映司はオーズドライバーを取りだし変身しようとした瞬間、ザリガニヤミーが次々と消えていく。恐らく状況悪しと判断し撤退したのだろう。命蓮寺の中に侵入したザリガニヤミーも同様に撤退しただろう。

「ガッ!？」

星が苦悶の声を上げると共に星の体から三枚の黄色のメダルが飛び出ていく。異形と化した腕と足も元に戻った。

体力を消耗していた所にラトラーターの力を発揮した星、もはや体力など一欠片も残っていない。星は地面へと倒れていった。

「——ッ!!」

意識を失う前に星が見たのは泣きそうな顔をした従者の姿だった。

第010話 謝罪と危険と黒色

「う、ん……」

星がゆっくり瞼を開く。視界に映るのは見慣れた命蓮寺の天井。これから察するに自分は今まで寝ていたと言うことになる。

「目が覚めたか」主人……」

横から聞きなれた声が聞こえた、振り向くと従者のナズーリン——心なしか目元が赤く腫れ上がっているように見える——と……見慣れない黒髪の青年が居た。

「貴方は……？」

「俺は火野映司、聖さんの知り合いです」

聖の知り合いだと言う青年——火野映司は人の良さそうな笑みを浮かべ、自身の名前を言う。

映司の言葉から出てきた聖、聖と言えばあの時、自分を庇ってあの怪物の攻撃を——

「聖ッ！」

星は鉛のように重い体をなんとか動かし、上半身だけ起き上がる。

「そうだ、聖は聖はどうしたのだ？ まさか——

居てもたつてられなくなった星はナズーリンに掴みかからん勢いで詰め寄った。

「ナズーリン！ 聖は、聖はッ!?!」

「落ち着いてくれご主人！ 聖は怪我こそしたが大したモノではないし、もう意識も回復している！」

「そうだったんですか……はあく……」

ナズーリンの言葉により星は安堵の溜め息を吐いた。

「とりあえず、ゆっくり休んでいてください。今、聖さん呼んできますから」

「それなら私が——」

怪我をした聖を動かすのは悪いと思い、星は自分の方から行こうとするが、

「いや、火野の言つたとおりご主人は休んでくれ。聖よりご主人の方が疲れているからな……」

ナズーリンの説得と、その今にも泣きそうな顔を見て映司の言葉に甘えることにした。映司は聖を呼ぶために部屋から出る。

元々静かだったこの部屋が更に静まる。星は再び横になり、ナズーリンの方を向く。さつきまで泣きそうな顔だったのに既に普通の表情に戻っている。あの顔は自分の見間違いのだろうか？ 星は色々と思考するが寝起きたばかりで上手く頭が回らない。

数十秒くらい経ち、星は聞こうと思っていた自分が倒れた理由をナズーリンに聞いた。

「あの、ナズーリン……」

「なんだいご主人？」

「私はどうして倒れたのでしょうか……？ 聖が私を庇ってからの記憶がどうにもなくて……」

「……………」

言葉を濁すナズーリン、だがゆっくりと話し始めた。

「聖がご主人を庇ったあと、ご主人が朝見せた変なメダルがご主人の体の中に入ったんだ……そしたらご主人の姿が変わった……その時の姿はまるで……化け物みたいだった……」

ナズーリンの声音からは明らかに怯えが混じっていた。ソレを聞いた星はショックよりもあのナズーリンがこんな怯えた姿をすると言う驚きの方が勝っていた。目の前に居る従者は今はただの少女となんら変わりはない。

そうするとその時の記憶がないとは言え、怖がらせてしまったと言う申し訳なさが湧いてくる。——普通はショックで気にする所ではないのだが、星は気にしてしまう。寅丸星は責任感の強いクソ真面目な性格なのだ。

「……すいません、ナズーリン。貴方を怖がらせてしまつて」

「……普通はシヨックを受ける所ではないのか？」

「シヨックは受けましたよ。でも、謝るのが先だと思ひまして……」

星のそのクソ真面目振りにナズーリンは思わず呆れてしまう。

もはやバカの域である。このままだとずっと謝り倒されそうだと思つたナズーリンは強引に話題を変える。

「とにかく！ 私はまだ大丈夫だからご主人は少しでも休んでくれ」

「え、でも」

「いいからー！」

ナズーリンのその有無を言わさない口調に星は押されてしまう。

こうなつてはしょうがないので、謝り足りないとは思ひながらもそうすることにした。だが、星の脳裏にはナズーリンの泣きそう顔や怯えの表情が焼き付いていた。



「——まったく、貴方は本当に馬鹿ですね」

神子から呆れがたつぷりと含まれた言葉が出た。

星よりずっと早く意識を取り戻した聖は治療も受けて、現在は自室に居る。ちなみに神子は聖の付き添い……と言うよりは嫌味を言うために来たのだろう。

「……馬鹿つてなんですか」

聖が若干怒りながら神子に聞く。まあ、いきなり『馬鹿』と言われて怒らない人はそうそう居ない。

「言葉通りの意味ですよ。まあ、映司にも同じことが言えますけど」

映司と聖には『人を助けるためなら命を張る』、と言う共通点がある。だからどつちも『馬鹿』なのだと思っただけ。

だが、聖には映司とは異なる点があるのだ。

「……人を助けるのが悪いって言うんですか？」

「悪いとは言いません。ただ——」

「？」

神子が何かを言おうとした。その時、

「——神子さん、聖さん、星さんの意識が戻りましたよ！」

「！」

聖はソレを聞き、顔を上げる。口には出さなかったが——それでも顔を見ればすぐに分かるが——異形の姿へと変貌したあげく倒れてしまった星をかなり心配していたのだ。

神子が自分に言おうとした事も気になるが、今は星の方が先決だ。

「そうですか、では行きましょう」

神子もその言葉を聞いて立ち上がる。神子は神子で星にお願いする事があるからだ。



「聖!! 大丈夫ですか!?!」

聖の姿を見るやいなや、星は心底心配した様子で聖に声を掛ける。大丈夫だとナズーリンから言われたものの、やはり心配だったのだろう。

「もう大丈夫ですから落ち着いてください星」

聖にそう宥められ、星は落ち着きを取り戻す。

そして、落ち着いた所で神子は星に問う。

「さて、寅丸星。君に一つ聞きたいことがあります」

「……? なんでしょう?」

神子に何かを聞かれる覚えがない星は首を傾げる。

「あの時、君の体から出たメダル……アレをどこで手に入れましたか？」

神子が星に聞きたいことは星の体から排出された三枚の黄色いメダル——コアメダルをどこで手に入れたか聞くことだった。

「……なにか知っているようだな」

神子の口ぶりからあの不可思議なメダルのことを神子は知っていると察したナズーリンは神子にそう訊ねる。

「ええ、知っていますよ。先に話しておきましょう、あの怪物やこのメダルについて」
そしてコアメダルやグリード、ヤミー、オーズについてのことを二人に説明した。

「なるほど……」

メダルから産まれた怪物や人間を神の領域に至らせることが出来る道具など……星とナズーリンにはかなり衝撃的なことであった。しかも外の世界ではつい最近まで目の前の男がメダルの怪物と戦っていたというのが特に驚いた。

聖は事前に軽くだが説明を受けていたのでそれほど驚いていなかった。

ちなみにこの説明は、

「ふーん、外の世界でそんなことが起こったのねえ。マミゾウは知ってた？」

「知っておるぞ？ 風都と言う街にはあれとは違う怪物とソレを倒す戦士と言う都市伝

説もあるしのお」

「ま、まだ似たようなのが居るの……」

「それより星さまは大丈夫なんでしょうか……？」

「ちよつと、みんな……」

「ハアツ……」

「……………」

ぬえやムラサ、二ツ岩ミソウ、多々良小傘、雲居一輪と雲山に響子と言った命蓮寺の面々がコツソリと聞いていた。ムラサと一輪と雲山の三人は最初は止めさせようとはしたが……無理だった、もう半ば諦めている。

とにかく出歯亀たちは放っておいて、神子の話は続く。

「説明も終わりましたし、もう一度聞きます。あの黄色のコアメダルは何処で手に入れたのですか？」

「……朝、起きたらいつのまにか握っていました」

その答えに神子は思わず呆然とする。

「……本当ですか？」

「嘘を吐いてどうなるんですか」

神子の疑うような口調に星はムツとしたように言う。

……星の口振りから見ても嘘を吐いているようには見えない。こうなったら星の持つ黄色のコアメダルを調べるしかないだろう。

「ともかく、そのコアメダルは一回調べる必要があります。」

神子の説明によれば、コアメダルの力を扱えるのはコアメダルの化身であるグリードかオーズだけだと言う。

しかし、記憶には無いが星はメダルの力を使ったと言う。なぜグリードでもオーズでも無い自分がコアメダルの力を使ったのかと言う疑問が浮かぶ、だが星にはコアメダルの知識など全くない。だから自分よりコアメダルに詳しい神子に預けた方が良好だろう……星はそう思い、神子に黄色のコアメダルを渡す。

「やっぱり黄色のコアメダルだ……」

映司がそう呟く。

それぞれにライオン、トラ、チーターが刻印された黄色のメダル……まさしくそれは映司が見慣れた猫系——グリード、カザリ——のコアメダルだ。

「……………」

神子は三枚のコアメダルを手に取り、コアメダルの欲を聴く。欲を聴けばなぜコアメダルが星の元に現れたか、星がコアメダルの力を使ったのかが分かるかもしれないからだ。

「火野さん、神子さんは何をやってるんですか？」

聖が映司に小声で聞く。

「ああやって、コアメダルの欲を聴いてるんです」

「なるほど……」

しばらく経ち、神子はコアメダルの欲を聴き終えた。

そして開口一番、

「……君、かなり危ない所でしたよ？」

「えっ……？」

星に向かってそう言った。神子は星が「なぜ」と言う前に説明を始める。

「まずはコアメダルがなぜ君の元にやってきたかについて説明しましょう。」

先程も説明しましたが今、存在するコアメダルは未完成ゆえ廃棄され幻想郷に流れ着いたモノたちに『完全な状態になりたい』と言う欲望が産まれ、融合したものです」

神子はタカ・コア、トラ・コア、バッタ・コアを取り出す。

「しかし融合しても完全な状態になったのはこの三枚だけ、他のコアメダルはあと一歩の所で未完全な状態だったんです。」

そこで自分らと近い力を持つ妖怪達の欲望と力を使って、今度こそ完全な存在になろうとしたんです。そして、君は黄色のコアメダルに選ばれたと言うわけです」

更に説明は続く。

「コアメダルに選ばれた者はその力をオーズと同じくコンボとして使うことができず。しかし——」

神子は一旦言葉を切るがすぐにまた喋り出す。

「その行為は大変危険です。精神を存在の支柱する妖怪が欲望の結晶であるコアメダルをドライバーも介さずに使用すると肉体的な負担は勿論のこと、なにより精神がコアメダルの膨大な欲に耐えきれず崩壊——死んでしまう恐れがあると言うことです。

コンボを使っていた時間が短く、力を持った妖怪だった君は倒れただけで済みました。が力の弱い妖怪だったらあのまま死んでいた所でしたよ？」

神子の言葉に出歯亀をしていた面々も含め、全員が言葉を失ってしまった。



男とグリードたちが根城とする洞窟。

ジャラジャラと金属が擦りあう音が響く。それはセルメダルの音だった。ザリガニヤミーの残骸である。

「素晴らしいね、リフウくん」

男が賞賛の言葉を送った先には禍々しい黒色のありとあらゆる甲殻類の特徴を取り込んだような異形——甲殻類系グリード、リフウが立っていた。

『ま、ゴーシュよりミーのヤミーの方が稼ぎには向いてるからNE!』

その容姿には似合わない陽気な口調でリフウは言う。

「だが、もう少し稼げられなかったのかね？」

男は不満げに言った。

確かにあのザリガニヤミーの数とセルメダルの枚数は釣り合わないのだ。セルメダ
ルがかなり少ない。

『あのヘンなタイガーちゃんにだいぶ倒されちゃったからNE……』

しばらく静寂が続く。しかし、すぐに男の「稼いでこい」と言うメツセージが込められた視線に耐えきれなくなったリフウがぐるりと翻し、洞窟から去っていく。また新たなヤミーを作り出すためだ。

『分かったYO! もっと稼げば良いんだRO!』

「流石は話が早いねえ」

男はまるで初めからこうなることを見越したかのように笑っていた。



「……………」

神子のあの説明から数十分程が経った。

ナズーリンは現在、命蓮寺近くの森で黄昏ていた。

神子の説明はナズーリンの頭に何回も反芻していた。もしかしたら自分の主は死んでいたかもしれない。

「いやだ……」

死んでほしくない。しよつちゆう失くし物はするし、騙されやすいし、箸で豆腐も掴めない程不器用だし、そのくせとても真面目でお人好しな私の大切な——

『オー！ 中々良い欲望を持つてるじゃん！ 小ネズミちゃん！』

刹那、ナズーリンの眼前に黒色の異形——リフウが立っていた。

ナズーリンがリフウに気付き、声を上げるより先にリフウはセルメダルを一枚、取り出す。

『さ、その欲望、』

リフウはセルメダルをナズーリン目掛けて投げつける。するとナズーリンの額にメダルの投入口が現われた。

『解放しNA♪』

— チャリイン……

第011話 慰めと自分に出来ることと誘拐

「ナズーリン……」

憔悴しきつたような声で自分の従者の名を呼ぶが、返事はこない。当然だ、今はここには居ないのだから。

あのあと、神子の説明を受けたナズーリンは飛び出てしまった。それも、とても泣きそうな顔をしながら。やはり、あの時の彼女は必至に泣きそうなのを必至に堪えていたのではないか！ なぜ気づけなかった！

誰が悪いと言うわけでも無いのに星は猛烈な自分への怒りと自己嫌悪に包まれていた。これでは彼女の主人失格である。

聖たちはそんな星を心配したのだが大丈夫だと言い張った。みんなの優しさを無下にする自分が憎たらしい。気晴らしになるかと思ひ、外に出てみたが——妖獣のタフさのおかげか歩けるまでにはなつた——全然気が晴れることはなかつた。むしろときおり吹く風が鬱陶しくてしょうがない。適当な所に座り込み、顔を俯く。再び、自らに向けての怒りと自己嫌悪が湧いてきた。

その時、青年の声が星の耳に届いた。

「星さーん！」

「貴方は……」

星の元にやってきた青年——火野映司は「失礼します」と言う。と星の隣に座り込む。

「何の用ですか……？」

「星さんが心配で来ました。良かったら聞きますよ？　こういうのって、親しい人より会って間もない人の方が話しやすいって言いますし」

映司は星の話を聞いてくれると言う。……確かにこういうのを聖たちに話すのはかなり気が引ける。みんなにはそんな自分の姿、見られたくないのだ。だが、会ってまもない映司に言うのはいくぶんか気が楽だ。

「……私は気づけなかつたんです……ナズーリンが今にも泣きだしそうだったことに……痩せ我慢してたことに……」

静かな、低い口調でしゃべり始める。

「ナズーリンは普段から失態ばかりする私に呆れてもけつして見放さなかつたんです……でも、」

ポロポロと涙が零れ始める。

「そんな、そんな良い子を私は泣かせてしまった……私は、私はナズーリンの主人失格なんです……ッ！」

普段から、失くし物をしたりなどダメな所をみせたりしているのに彼女は——ナズーリンはそんな自分に愛想を尽かさず支えてくれている。それがたまらなく嬉しかった、そしてたまらなく情けなかった。

そんな自分を何とかしようとして頑張ってみたものの、結局はダメで……拳句の果てにナズーリンを泣かせてしまった。星は自分が許せない。もう涙が止まらない、壊れた蛇口のように涙が溢れてくる。

「——それを決めるのは星さんではありません。ナズーリンちゃんです、だから大丈夫ですよ」

映司が口を開いた。

「……なんでそんなことが言えるんですか……」

「俺は二人のことをあまり知りませんが、でも話を聞く限りナズーリンちゃんが星さんを見放すなんて俺には思えません」

映司は星とナズーリンのことは殆ど知らない、しかし先程や今の話を聞いた限り両者の間には強い絆が感じられた。だから、これくらいのことではナズーリンが星を見放すとは思えない。

「……………でも、私は普段からダメで……」

「自分のダメな所を自覚して直そうとしているだけでも俺は凄いと思いますよ。それ

に、どうしても心配ならナズーリンちゃんに聞いてみましょう、俺も手伝いますから」
「……はい」

静かにそう呟く星、先程まで自己嫌悪に包まれていたが今は少しだけだがそれが薄れていた。

「……ありがとうございます、おかげで少し楽になりました」

「いえ、俺も星さんが元気になって良かったです」

そんなことを話していた、その時――

『『キシャアアアアアアアアアアアツツ!!』』

「ツツ!」

突如、映司たちの前の空間が歪んだと思ったらエビを人型にしたような異形――数体のエビヤミーが現れ、二人目がけて飛びかかってきた!



映司が星を元気づけていたのと同時刻。

「はあ……」

自室で聖が溜め息を吐いていた。原因はもちろんナズーリンと星のことである、彼女

らの力になれないことが悔しいのだ。

「二人は大丈夫なんでしょうか……」

思わずそう呟いてしまう、聖も二人のためになにかしたいが星からは「何でもないと押し切られ、ナズーリンを探そうにもこの怪我であまり身動きが出来ない——と、言うよりもムラサと一輪に「無理して動かないように」と釘を刺されてしまっている。

動こうにも動けないのが今の状況だ。無力感に苛まれる。

「——そんなウジウジしてないでもっとビシツとしたらどうですか？」

そんな聖に辛辣な言葉を投げかけるのは神子だ。彼女はもちろん聖に嫌味やらなんやらを言うためにここに居るのだ。もう一つ、映司に「聖さんをお願いします」と頼まれたのもあるのだが。

聖はそれに対し、若干の怒気を孕めながら言う。

「二人が心配なのにビシツとなんて出来ませんよ……」

「なら、休んで一刻も早くその怪我を治すことですな。それが、今の貴方に出来る『自分出来る事』です」

『『自分出来る事』……』

「そうです——ってなんでこんなことを貴方に言ってるんですかね、私は……」

商売敵とも言える相手にこんなアドバイスをしてしまい、後悔の念を見せる神子。だ

が、もう遅いのですぐに気分を切り替え聖に星のことを伝える。

「寅丸星に関しては映司がなんとかしてくるでしょう、私は彼の欲は聴けませんけれども中々の場数を踏んで来ているのは分かります」

神子は映司の欲は聴き取れない、だが持ち前の観察眼と外の世界ではグリードやヤミーと戦っていたという事実があれば、それくらいは簡単に分かる。

「さて、貴方も少しは持ち直したようですし、ヤミーのこともありますから私は失礼しましうかね」

神子はそう言い、立ち上がった。その時――

「ツ!!」

ヤミーを感じ取る。しかし、少し様子がおかしい。いつもなら強大で軽く苦痛すら感じるほどののに、今回はとても微弱なのだ。精々少し欲が強い人間くらいしかない。

神子も初めは気のせいだと思った。だが、ヤミー特有の異質で歪んだ欲がそれを否定する。ともかく、ヤミーは倒さねばならない。

「どうしたんですか……?」

「ヤミーが現れました。村紗水蜜らに怒られたくなかったら貴方は大人しくしてここでですぬ!!」

それだけ言うと、神子は飛び出すように出て行った。



——タカ！ トラ！ バツタ！

——タ・ト・バ！ タトバ、タツトツバ!!

「セイツ!!」

早速変身した映司——オーズは群がるエビヤミーをトラクロードで一閃、そのまま蹴り飛ばす。

『『キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!』』』』』』

「うわわっ!!」

戦いは数で決まるとはだれが言ったものか、際限なく増えるエビヤミーに押されてしまふ。

『キシヤ!』』

「グツ……!」

更に一体のエビヤミーが星の隙について腹部を殴り、星を気絶させた。星を気絶させたエビヤミーは星を抱え、森の中へ消え去った。

「しよ、星さん!! ああもう!!」

なおも纏わりつくエビヤミーをオーズは召喚したメダガブリューで薙ぎ払う。だが、エビヤミーは際限なく増えていく。

ガタキリバが使えればエビヤミーの大群も一網打尽に出来るのだが、生憎クワガタとカマキリのメダルは今手元にはない。

「ハアアッ!!」

オーズはメダガブリューを投擲。メダガブリューがブーメランのように飛びながらエビヤミーたちを切り裂いていく。

『『『キシャアアアアアアアアアアアッ!!』』』

しかしどれだけ倒してもエビヤミーはどんどんやってくる。疲労を感じながらもオーズはメダガブリューを握る手を強めた。

その時、

——光符「グセフラツシュ」

虹色の弾幕がエビヤミーに襲いかかる。数十体のエビヤミーが吹っ飛ぶ……がやられてはいない。弾幕を撃った主——神子は地面に降り立つと、腰に携えた宝剣『七星剣』を振り抜き、即座に新たなスペルを発動する!

——光符「無限条のレーザー」

七星剣が空間を切り裂き、裂け目が現れる。更にそこから無数のレーザーが表れ、エ

ビヤミーを貫く。数十体のエビヤミーは今度こそ完全にセルメダルへと還った。

「——大丈夫ですか？ 映司」

「神子さん！ 俺は大丈夫ですけど……星さんがヤミーに連れ去られてしまったんです」

「寅丸星が？」

その言葉に神子は考える。エビヤミーは寅丸星に関する欲望から産まれたと推察するのが妥当だ。それよりも気になったのは——昨日と先程現れたザリガニヤミーは黒い甲殻類のヤミー、そして今現れたエビヤミーも黒い甲殻類のヤミーだ。そして、その甲殻類系のヤミーたちには神子が欲を上手く聴き取れなかったと言う事実。

——まさか、黒いヤミーは「隠れる」ことに特化した特性を持つヤミーなのか？ そんな仮説が生まれた。ありえない話ではない、コアメダルの欲を聴き取ったさいヤミーには種類ごとに様々な特性を持つことはもう知っている。例えば爬虫類のヤミーは時間が経つと脱皮を行い、力を増したり猫系のヤミーは宿主を取り込んだり……いった具合だ。

そのため甲殻類のヤミーが「隠れる」ことに特化した特性を持っていてもなんら不思議なことではない。ザリガニヤミーの件も昨日の時点では十体くらいと非常に少数だったのだろう、だから神子が気づけなかった。そして今日の百を超えるザリガニヤ

ミーの登場でようやく通常のヤミーが放つ欲の大きさ同等になった。

先程現れたエビヤミーはざっと数えて三十体ほどだ、それで微かに聴き取れる具合だ。ちなみにだが、映司も似たような推測をしていた。

——両者ともあれこれ考えていたが、今はそれどころではないということを出す。

「ともかくヤミーは倒さねばなりません、着いてきてください」
「分かりました」

神子の案内に従い、オーズはエビヤミーが多数蔓延っているであろう森の中に足を踏み込んだ。

第012話 怒りと守ると灼熱コンボ 前編

——時は少々遡り。

「なっ……!!?」

ナズーリンが声を上げるも時すでに遅し、ヤミーの幼体——白ヤミーがナズーリンの体から這い出てきた。

『オオ〜！ コイツはあ、なかなかストロオングなヤミーだNE!!』

「ツ!? お前……ツ!!」

リフウの存在に気づき、なおかつリフウがヤミーを作ったという事実を確認したナズーリンはすぐさま構える。しかし、リフウは手を前にかざしナズーリンに制止を求めらる。

『ノンノンノン!! ちょっとストップストップ、小ネズミちゃん!』

「ツ!!」

——守符「ペンデュラムガード」

リフウにただならぬものを感じたナズーリンはリフウの制止を無視し、スペルを発動した。弾幕は全弾リフウに直撃する、しかしリフウには傷一つなく、逆にいつの間にか

真後ろに回り込んだリフウにナズーリンは捕まってしまった。

「なっ!? 離せ!」

『オーウ! クールになろうZE! 小ネズミちゃん! ミーのお話を聞いてちょうDAI!』

「お前と話すことなんて……!」

ヤミーを作ったことからコイツは映司たちの話で聞いたグリードと言う存在だと分かったナズーリンは警戒心と敵対心剥き出しでリフウを睨む。コイツとあともう一体いるらしいグリードたちが密かに幻想郷を蝕む存在というのもあるが、なによりコイツが作ったヤミーが原因で星が倒れたのだ。

『もこう、しょうがないNA!☆ ミーが小ネズミちゃんを素直にさせてあげようKA!』

「……ッ!?!」

なおも抵抗するナズーリンを見たりフウは掌に仕込まれている毒針をナズーリンの首元に突き刺した。

「なにをした……!!」

『別にいい? ただちよーつと小ネズミちゃんが自分の欲望に素直になれるようにした・た・け☆』

リフウがそう言った瞬間、ナズーリンの体の奥底からある一つの欲望が沸き立った。

『さあ、小ネズミちゃんが見ることを……キミの欲望を解放しちゃいなあ☆』

欲望は元からナズーリンにあったもので、リフウの毒によりさらに倍増される。その欲望は——『ご主人を死なせない』。

「うぐ、ああああ……!!」

膨れ上がった欲望はタチの悪い熱病のようにナズーリンを蝕む。だけど負けてしまったらご主人に迷惑をかけてしまう——そんな確信の元、ナズーリンはひたすらに我慢し続ける。

『ほら、我慢したってなあんにも良いことなんてないよお？』

リフウがそう煽りかけてくるが苦痛のためナズーリンには聞こえていない。こうしている間にもどんどん欲望が耐え難いほどの痛みを与えてくる。

「あああああ……あつ……」

やがて痛みがナズーリンの許容量を超え、ナズーリンはそのまま意識を失ってしまった。

『あらく、気絶しちゃったKA。ま、良いか〜♪』

そう言いながら、リフウは去って行った。

『『『キショアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!』』』

「うわあああああッ!」

森の中、ムラサとぬえは必死に大量のエビヤミーから逃げていた。なぜこんなところに居るかと言うと、ナズーリンを探すためである。もちろんぬえは最初は嫌がっていたがムラサから「昨日ナズーリンのチーズ食ったのぬえでしょ?」と言われ、渋々と手伝っていた。

二人はナズーリンを探すために歩いてきたのだが、不幸にもエビヤミーの集団に遭遇。戦ったが、数の差には勝てずに追いかけてここに突入したのだ。

「ムラサアーツ!! 何とかしてよおー!!」

「何とかしてって言われてもおおー!!」

この状況になるまで何十体ものエビヤミーを倒してきた二人、体力も妖力も消費してあの数を相手にする余裕なんてない。

だが、この大群に捕まったら終わりなのは分かっているのでこうやって気力で走って

いるのだ。

『『キシャアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!』』

「あーもーっ!! しっこーい!!」

ぬえがそう毒づくが、エビヤミーたちはおかまいなしである。

やがて、二人の気力も磨り減っていき、エビヤミーたちとの距離が縮んでいく。

「お、追い付かれるーっ!!」

二人がそう叫んだ時だった、

——ゴックン! タトバ!

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

奇妙な音声と咆哮とともに何かの影が二人の上を通り過ぎる。

「セイヤアアアアアアアアアアツ!!」

影——オーズは三色の光が宿り、破壊力が増したメダガブリューをエビヤミーに向

かって振るう!

『『キシャアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!』』

エビヤミーの群れの大半は断末魔を上げながらメダルに還り。残りは、

——秘宝「聖徳太子のオーパーツ」

『『キシユアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!?!』』

神子のスペルにより倒された。

オーズは二人に駆け寄る。

「大丈夫？」

「う、うん……」

オーズの問いかけにぬえが答えた。それを聞いたオーズは一安心し、改めてエビヤミーたちがやってきた方角を向く。

「それにしても、あのヤミーたちはまるで私たちを森の奥に近づけさせたくないみたいですね」

「はい、それは俺も思っていました」

オーズの隣に来た神子がそう言う。

星をさらったかと思えば、このように他人を近づけさせないように妨害する。一体どんな欲望かイマイチ分からない。分かっているのは星絡みの欲望、と言うことだけだ。

だが、断定はできないがもし森の奥に星が居るのなら助けに行かなければならない。オーズは再びムラサとぬえの方へ向き、こう言った。

「ムラサさんとぬえちゃん……だっけ？ 二人は命蓮寺に戻ってきてくれませんか？ ヤミーは俺たちでなんとかしますから」

オーズのその言葉にぬえはムツとする。

「なっ、なによソレ！ 足手まといだつて言いたいの!？」

「ええ、そうで——「わーっ！ わーっ！」——……」

神子がぬえに毒づこうとするが、寸前のところでオーズが阻止したためやや不機嫌になる。

オーズはぬえの目の前まで行き、視線をぬえに合わせて語り始めた。

「そうじゃないよ、ぬえちゃんたちにはもしヤミーがまた襲ってきたときに命蓮寺を守つて欲しいんだ」

「……」

「俺も神子さんもそうしないように頑張るけどもしかしたらヤミーがこつちにくるかもしれないんだ、もしそうなったら命蓮寺を守るのは一人でも多い方が良いんだ。だから、お願い！」

両手を合わせ、『お願いのポーズ』を取るオーズ。その言葉を聞いたぬえはしばらく考え込み、

「……分かったわよ、その仙人よりはまだマシそうだしね」

「あははは……でも神子さんもそれほど悪い人じゃないよ？」

「いーえ！ ロクでもないわよ、あの仙人は」

ぬえからはとにかく嫌われている様子の子神子。神子の方を見てみるとまったく歯牙

にも掛けていないようで、どこ吹く風といった様子だ。それを見たオーズはもう苦笑いするしかない。

だが、すぐに気持ちを切り替える。

「それじゃ、ぬえちゃんにムラサさん。よろしく頼んだよ」

「任せなさい、行くわよムラサ！」

「えっ、ぬえ!? えっとぬえのムチャを止めてくれてありがとうございました!」

ぬえに引つ張られながらもムラサはオーズにお礼を言い、そのまま二人は命蓮寺へと去って行った。

「さて、邪魔者もいなくなりましたし行きましようか映司」

「邪魔者って……神子さん……」

「君はともかく私があの方たちと仲良くなる道理はありませんよ、特に聖白蓮とはね」

またこれである。しかし映司は神子が嫌っているのは命蓮寺の面々ではなく聖一人を嫌っているように見えた。前にも思ったがなぜ神子は商売敵と言ってもここまで聖を嫌っているのか？

「神子さん、どうしてそこまで聖さんを嫌うんですか？」

「別に大した理由ではありませんよ。それよりも今はヤミーを優先させましょう」

神子がここまで聖を嫌う理由も気になるが、今はヤミーを優先しなければならぬ。

オーズはその疑問を抱えながらも神子の案内の元、ヤミーが集中している場所へと駆けていった。

その際、神子はあることを考えていた。

（寅丸星が倒れたのはコアメダルの力に体が耐えられなかったからだ。しかし、その力を半分にできれば――？）



「ん……」

寅丸星は本日二度目の気絶からの目覚めを体験する。

「確か私は……、——ツ!?!」

状況を確認しようとした矢先に星はとても異様な周囲の光景を見てしまう。それは

『『キシャアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!』』

『『キュラアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!』』

周囲を埋め尽くすエビヤミーの群れ、群れ、群れ。ざっと見渡しただけでも百体は軽く超えている。

「……ッ!!」

生理的嫌悪を催すこの光景に思わず鳥肌が立ってしまふ。

『シナセナイ……ゴシユジンハシナセナイ……!』

その時、エビヤミーの群れの中に一匹だけ存在する、全ての脚が人間の手のような形になっている漆黒の巨大なエビの怪物を見つけた。さらに良く見てみるとその巨大エビからエビヤミーが次々と産まれてきているのではないか、もしかしたらあの巨大エビがエビヤミーの親玉なのだろうか？

あれこれ考えていると、——不意に誰かに背後から抱きつかれた。

「ご主人……」

「ッ!? ナズーリン……ッ!?!」

この声ですぐに分かった、今星の背中に抱きついている者は星の従者——ナズーリンだ。

このエビヤミーの群れといい、背中中のナズーリンといい、衝撃的なことが極短い合間に立て続けに起こって星の頭はパンク寸前だ。だが現状を把握しなければならぬ星は努めて冷静に振る舞い、ナズーリンに声をかける。

て持ち主の所へと戻っていった。

「大丈夫ですか!? 星さん! ナズーリンちゃん!」

回転する光ことメダガブリューの所有者オーズ——映司は星とナズーリンの姿を見ると、すぐさま安否の確認をする。

「私は大丈夫ですけど、ナズーリンが……!」

「ナズーリンちゃんが……?」

オーズは強化された視力でナズーリンを見る。すると、……瞳の焦点が合っていない、明らかに様子がおかしい。

「神子さんは二人を頼みます! 俺はヤミーを!」

「……いささか不服ですが仕方ありませんね、分かりました」

オーズはヤミーの所へ、神子は二人の元へ向かった。そして星とナズーリンの近くに来た神子はナズーリンにある違和感を感じた。

(……十欲を感じない?)

生物には十欲という名前通り十の欲を持ち、神子はそれを聴き取るにより相手の心を読みとることができ更には未来をも見通せるのだ。そしてソレは妖怪にも存在するのだが、今のナズーリンにはその十欲が聞こえない、そのかわりに一つのとても欲望があった。

(寅丸星を死なせない、か……)

恐らくはこの欲望が肥大化し、十欲を含むその他全ての欲望を掻き消したのだろう……それがナズーリンの様子がおかしい原因だろう……神子はそう推測した。

だが、このことを星に伝えるべきかどうか、星はナズーリンを悲しませたのは自分のせいだと思ひ意気消沈している。そんな状態の星にこのことを伝えたら更に塞ぎ込むだろう、神子はどうすべきか考える。神子はあれこれ考え、結果とりあえずは当たり障りのないことを聞いた。

「寅丸星、彼女はなにか言っていましたか？」

神子がそう尋ねると星は口を開く。

「……さつきナズーリンが言っていました……『ご主人は死なせない、私が守るんだ』って……」

「！」

なんと、星はもうこのことをナズーリンの言葉で知っていたのだ。地雷を踏んでしまった、最悪の展開である。

映司によって回復しつつあった星の心は再び崩れ始めた。

「やっぱり私は彼女の主人の失格です……！ なにが毘沙門天の代理ですか……！ 私
のせいでナズーリンが不幸になるのなら、私がなにかをすれば彼女を泣かせるなら、私

は何もしないほうが、居なくなつたほうが良いんです……っ!!」

「——なんだと……っ!!」

神子はその言葉を聞き、あることを思い出した。

——あ、ああああ……。

——うわあああああああああああああつ!!

あの忌々しい、けれど決して忘れてはいけないあの時の出来事。
拭いきれないトラウマ。

気付いたら神子は星に掴みかかっていた。

「ふざけるなアツ!!」

「えっ……っ?」

神子の豹変に星は呆けてしまう。

「なにが『なにもしないほうが良い』だ!! なんて!! なんて、そんなこと言うんだよ!!」
もう神子は止まらない、いや神子自身でも止められないのだ。

「神子さん……っ?」

神子の変わりようにはオーズも気づいてはいるがそのことに対し気を回すことはエ

ビヤミーの群れが許さなかった。神子の叫びは更に続いた。

「なんでだ！　なんで、お前らはなにもしない前からそんなことを言うんだ！！
——ッ！！」

そこで、やっと神子は我に帰る。

即座にトラウマを思い起こされただけであんなに取り乱してしまった自分が嫌になり、自己嫌悪の感情が表れるもすぐにそれを振り払った。

「すいません……とつぜん取り乱したりして……」

「いえ……」

「——ですけど、なにもしないのは考えものですね。私には分かりますよ、君がこの場で今やりたいことが」

「……」

神子に言われたことは凶星である。星の内にはこの場で今やりたいその欲望が渦巻いている、しかし星にはそれを行えるだけの力がない。

……いや、力はある、あの黄色のコアメダルだ——

「……確かに私にはナズーリンを守ると言うやりたいことがあります……ですけど私はそれを成すほどの力がありません……それにもしなにかあつたら彼女を泣かせてしま……」

「だから願うんですよ、あの黄色のコアメダルに」

「メダルに……?」

「ええ」

しかし、あの黄色のコアメダルは使えば星は死んでしまう恐れがある。だがそれは『星』一人ならの話だ。

神子はある可能性に賭けてみたのだ。

「あのコアメダルは使えば君は死ぬかもしれません、だけど従者を生涯守るのなら多少のリスクは覚悟するべきでしょう? それにコアメダルは君を選んだんです」

「……………」

あのメダルの力を使えばまた自分が倒れ、ナズーリンがまた泣いてしまう……星はそればかりに気を取られて怯えていた。しかし、多少のリスクを背負わなければナズーリンは守れない。自分が傷つかずに従者を守ることなど不可能なのだ。

星はナズーリンを自分の前に寄せ、目と目が合うようにする。

「ナズーリン、これからも私は貴方を泣かせるかもしれませんが」

「——こんな不器用で不用心でダメダメな私ですから、全力で貴方を守ることしか出来ない私ですが」

「——こんな主人でも生涯貴方を護らせてくれませんか?」

不器用で口下手な自分にはこんなことしか言えない、だけど確かな決意とメダルへの願い。

その時、星の欲望に反応して神子の懐から三枚の黄色のコアメダルが飛び出て星に入り込もうとするが、その前に神子がキャッチしてオーズに向けて投げた。

「——映司!!」

エビヤミーの群れと激闘中のオーズは神子のパス能力の高さも手伝って、見事それをキャッチした。オーズはコンボチェンジを行うためバッタレツグの力で一旦距離を取る。

星はオーズの所にまで近づいた。ナズーリンは神子に任せてある。

「星さん……?」

「映司さん、私も微力ながら助太刀します」

「大丈夫なんですか?」

「はい、だいぶ動けるようになりました。体の頑丈さには自信がありますから、——それに私はナズーリンを守りたいんです!」

「……分かりました! でも無理はしないでくださいね」

「はい!」

会話を終えるとオーズはオーズドライバーに嵌められていたタカ・コア、トラ・コア、

バッタ・コアを抜き、新たにライオン・コア、トラ・コア、チーター・コアを嵌めオー
スキャナーにかざした。

——ライオン！

——トラ！

——チーター！

——ラッタア、ラッタア!! ラトラーター!!

オーズの姿は一変した、あまねく全てを照らし焼き尽くす灼熱の獅子の鬣、鋼鉄をも
切り裂く虎の強爪、風すら追い抜く狩猟豹の俊足。

スピードに特化した灼熱のコンボ——ラトラーターコンボが光臨した！

第013話 怒りと守ると灼熱コンボ 後編

オーズがラトラーターコンボになったことにより星にも変化が起きた。

「これは……」

瞳は青く染まり、黒が混じった金の髪は金一色になり髪の色も増え、どことなくライオンの鬣を連想させる。両腕は鋭い鉤爪——トラクローが装着され、脚はチーターレッグに酷似した装甲が現れ胸部にはオーラングサークルが光輝いている。

「映司さん、これはなんでしよう……?」

「すみません……俺にも良く分かりません」

見た目からしてコアメダルが原因であろうこの変化について当然ながら分からない星はオーズにこのことについて聞くも、オーズも知らないのだ。ただ、前見たコアメダルの力を使い半ば暴走状態であった星に似てはいるのだが。

「神子さん! 星さんのこの姿って一体なんですか!」

星の変化について、自分が知らないのならあと知っているのは神子だけだ、と判断したオーズは神子に聞いてみた。

「詳しいことは後で話しますが、今の寅丸星はコンボの力が使えます!!」

「え、それって……」

「大丈夫です！ 負担は遥かに少なくなっているはずです！ 全力で戦いなさい！」
不安はあったが、それも確信に満ち溢れた神子の言葉に掻き消される。

二人はトラクローを展開し、腰を低く構え、そして風より速く駆けた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！」

黄金に煌めく四つの爪がエビヤミーを次々と切り裂いていく、そして次は低く跳躍し、リボルスピッキックが炸裂した。二人はエビヤミーを蹴り潰し、セルメダルへと還元しながら前進していく。

そうしていると、エビヤミーを次々と生み出している巨大なエビの怪物の全体像が見えてきた、オーズも星も巨大エビの全身をすっかり見たのはこれが初めてだ。

(あれはもしかして……)

オーズは今までの戦いから培ってきた勘からエビヤミーを生み出す巨大エビが恐らく、エビヤミーの親玉ではないかと推測する。まあ、そうでなくとも倒さなければいけないのは確かなのだ。

「星さん！ あの大きなのを倒しましょう！」

「はいー！」

オーズと星は巨大エビヤミーに急接近し、全身から灼熱の光——ライオディアスを放

「ええ、なんとかできます」

今にも消え入りそうな弱弱しい、だがあり得ないほどに歪んだ忙しなく移動する欲を神子は聴き取る。

「分かりました、あのヤミーは命蓮寺に向かって移動しています」

それを聞いて、星の表情は更に険しくなった。

「ッ!？」

「それなら急がないと！ 早く行きましょう、星さん！」

「分かっていますッ！」

チーターレッグの力をフルに使い、二人は命蓮寺へと向けて駆けていく。

「まったく、あの二人……私のことをすっかり忘れていますね、っと！」

自身を置いて先にいったオーズたちにやや呆れながらも、ナズーリンを抱えて——見た目通りかなり軽いため抱えるのは容易だ——二人の後を追っていった。



「ねえ、大丈夫なの？ ムラサ」

一方、命蓮寺ではぬえとムラサからの話により来るかもしれないエビヤミーを迎え撃つために星とナズーリンと聖——一輪たちにより無理やり自室に押し込められた——を除く命蓮寺の面々が揃っていた。

しかし正直な所、ナズーリンと星を救出に向かったのがあの豊聡耳神子と見知らぬ男——確か火野映司であったか——なのが非常に不安なのだ。そのことを一輪がムラサに聞いてみると、ムラサはこう返した。

「うーん、大丈夫だと思うよ？ 見た感じ映司って人、聖並みのお人好しみたいだしね」
「聖並み、か……」

「聖並み」と言う言葉に一輪は思わず苦笑してしまう、もし映司がそうならなにも心配はないのだが……。

そう一輪が思っていると地面から何かが潜り進んでいるような音が聞こえてきた。

「ッ!!」

その音を聞いた全員が警戒する中、音は段々と近づき地面が盛り上がった。そして――

――キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

巨大エビヤミーが地中から飛び出してきた。

「デ、デツカあッ!？」

小傘が巨大エビヤミーを見て率直な感想を述べる。確かに巨大なヤミーであろうこの怪物は先程戦ったエビヤミーの数倍もの大きさを誇っていた。

皆が巨大エビヤミーの大きさに驚いていたが、すぐに構える。その時、二つの風が巨大エビヤミーに向かって駆けていった。

「ハアアアアアアッ!!」

その二つの風こと、オーズと星は超速で巨大エビヤミーの懐に潜り込み、トラクローを突き刺す。そして抜くと同時に巨大エビヤミーを蹴り、その反動で後方に跳び距離を取る。

「みんな無事ですかッ!？」

「えっ、星。その姿は……?？」

「そのことは後でお話します。とにかく、皆さんは後ろで援護をお願いします」

そう言つてオーズはみんなを後方に下がらせた。それを確認すると二人は一気に走りだす、後方に居るムラサたちも弾幕を撃ち、巨大エビヤミーを牽制する。

そして、二人はあっという間に巨大エビヤミーの懐に潜り込み、ライオディアスを放った。

——キシヤアアアアアアアアアアアッ!？」

巨大エビヤミーが怯んだ隙を狙ってオーズは予め召還していたメダガブリューにセルメダルを喰わせる。

——ゴックン!! ラトラーター!!

メダガブリューの刃が白熱し、灼熱の刃となった。

「セイヤアツ!!」

——キシヤアアアアアアアアアアアアツ!?

オーズはメダガブリューを振るう。巨大エビヤミーの左側の脚が全て切断され、切り落とされた脚はセルメダルに還った。

メダガブリューの一撃を受けた巨大エビヤミーは弱り果てている。二人はトドメを刺すべく、スキヤニンググチャージの体勢に入るが——

——キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!

最後の悪あがきか、巨大エビヤミーは今までの比ではないほどの量のエビヤミーを産み出す。その量は二人を押し潰さんばかりだ。

「ぐあッ!」

「ぐッ!」

実際に産み落とされたエビヤミーたちはオーズと星に纏わりつき、動きを封じ始めた。そして巨大エビヤミーは残った右側の脚で飛びかかる。

星には一番迷惑をかけてしまった。ナズーリンは自分が酷く情けなく感じていた。

「——ナズーリン」

「ツ!?!」

星はそんな状態のナズーリンをそつと、優しく抱き寄せる。

「貴方は私をそれほどまでに思っていたのでしょうか？ ヤミーを生み出すくらいに」

「ああ……」

「それにヤミーは欲望を暴走させるんだ。例えそれが人を思つての欲望だとしてもね、だから——」

映司に続いて、星も微笑みながら言う。

「ナズーリンはなにも悪くはありません、と言うことです」

「そうか……」

「それに私はナズーリンを守ると誓つたんです、例え誰かが貴方を悪く言おうと絶対に守つてみせます!」

「ははは……頼もしいな、これで物忘れ癖がなければ完璧なんだがな」

「うぐつ、善処します……」

「でも……ありがとう、ご主人。貴方のその言葉でだいぶ楽になったよ、だから……」

「?」

「いい加減、離してくれないか……? 流石に恥ずかしいぞご主人……」

ナズーリンが顔を赤らませながらそう言った。つい、勢いで抱き締めてしまった、そのことに今更気づいた星は慌てて彼女を離す。

「うわわわわわわ、ご、ごめんなさいっ」

「まったく……」

星のおつちよこちよいぷりにナズーリンは呆れながらも、そういつた所を含めて自分は星を好いているのだと再確認し、思わず笑みが零れてしまう。

「——ナズーリンがまた元気になって良かったですね、神子さん」

「……まあ、あのまま落ち込んでいるよりはマシですね」

神子に対してそう語りかける聖であったが、彼女は冷たく言い返す。やはり、神子が聖に気を許すのはまだまだ先のようなだ……と映司は思った。

「あ、そう言えばあの星さんの姿は一体なんだったんですか?」

「それは私も気になっていました」

これ以上、神子が毒を吐く前にと映司は気になっていた、ラトラーターに似た姿——今は元に戻ったが——の星について問いかけてみる。

「ああ、あれですか。推察混じりの説明になりますが、あれは——」

神子の説明——推測混じりののだが——によると、あの姿はコンボの過剰な力を生きた

オーズドライバーとも言える星がその力を使い、『変身』した姿だと言う。

「——現にコンボを使っても疲労が少ないでしょう？ 映司」

「そういえば、確かに……」

コンボにはとてつもない力がある、しかしそれゆえに過剰な力に蝕まれコンボは体力を酷く消耗するのだ。映司も初めてコンボを使った時には倒れたものだし、段々とコンボに慣れてきてもかなりの疲労感があった。

しかし、今回はコンボによる疲れが殆どない。それは星も同じことで、多少の疲れはあるものの最初程の疲れはない。

「寅丸星に関してもコアメダルの力全てを使っていた先程と違い、余った力を使っていますからね。映司と同様に寅丸星にかかる負担も遥かに軽くなっています……まあ、恐らくその分能力は下がってしまうでしょうが。とりあえず、あの姿についてはこんなところでしょうか」

神子の説明が終わり、今までお礼を言うのを言いそびれていた星は映司の前へ寄った。

「ありがとうございます、火野さん。貴方のおかげで寺は無事で済みました」

「いえ、俺たちも聖さんに助けてもらったのでお互い様ですよ」

もちろんヤミーと戦うことは自分のやるべきことなのだが、それだけではない、もし、あの時聖が居なかつたら確実にコアメダルを奪われていただろう、だからこれは恩返しでもあるのだ。

そして、映司に礼を言った星は今度は神子の方へと向いた。

「そして、豊郷耳さんもありがとうございました」

「んなあッ!？」

星は神子にもお礼を言うが、当の神子はそんなことを言われるとは思ってもみながつたように、素つ頓狂な声を上げてしまう。

「な、なぜ私まで……ッ!？」

「あの時、貴方は私を叱咤してくれたではありませんか。あの言葉が無ければ私はあのまま、塞ぎ込んだままだったでしょう」

「くっッ!!」

あれは神子が怒りのあまり、言ってしまったことである。正直、触れてほしくない事柄で、だから星のそれに対する純粋な感謝の気持ちはプライドの高い神子にとってかなり堪えるものであった。

「あああッ!! 映司ッ、帰るぞッ!!」

「え、ちよつ、神子さん!？」

耐え切れなくなつた神子は術でを使って仙界に帰るのも忘れ映司の首襟を掴み、映司を引きずつたまま、走り去つてしまった。

「神子さん、まだ聖さんにちやんとお礼言つてな——」

「知るか、そんなことおとおおとおおッ！」

ちなみにこのゴタゴタのせいで人里に忘れてしまった夕飯の買物思い出したのは、もう少し後のことであつた。